

第四部

手記、記憶

誰もが経験した事のない激震と大津波であったため、多くの人々が心に強い衝撃を受けました。学生と教員の皆さんがそれぞれの体験あるいは感慨を綴っています。特に、ライフラインが途絶えた状況下で、自然発生的に避難所となった星陵体育館の状況が紹介されています。学生と教職員が協力して震災直後の困難に取り組みました。良陵新聞学生編集長の手記では、大津波の被災地域で奮闘する同窓生に焦点を当てた特集号のことが紹介されています。良陵新聞の編集に携わる学生編集員のご努力に敬意を表します。また、旧制第二高等学校端艇部以来 100 年以上の歴史を有するボート部の状況が紹介されています。震災直後の混乱の渦中で、ボート部員の安否が最も懸念されましたので、感慨深いものがあります。また、3.11 の印象が強烈的なため、つい見逃されてしまいますが、平成 23 年 4 月 7 日（木）23 時 32 分に発生した震度 6 強の余震も、深刻な被害を与えました。震源は宮城県沖、牡鹿半島方位東 40 km、地震の規模を示すマグニチュードは 7.4 と推定されています。最後の手記では、この余震のことが紹介されています。事実、この余震により、3.11 の本震を絶え抜いた機器類が数多く破壊され、ようやく片付けた物品が再度落下するなど、精神的にもやや落ち込んだことが思いだされます。（柴原茂樹）

大場得志 総務室

3月11日14時46分に発生した地震の揺れはその大きさも時間の長さも尋常ではなかった。地震は長くとも1分ぐらいで終わるだろうという先入観と、加えて今までに経験したことのない揺れの大きさに動転していたこともあって、すぐに外に出ようとはしなかった。とうとう数分間の揺れがおさまるまで立ったままで室内にいたが、地震の最中に戸外に避難すべきか否かをとっさに判断することは難しいと感じた。本震がおさまって職員が避難した後、ただちに研究科内にいる学生・職員の安否確認が行われた。余震が断続的に続く中、建物の中の被害状況や人が取り残されていないかどうかを複数の職員で確認することになり、我々の組は懐中電灯をたよりに薄暗くなった5号館の中に入った。エレベーターが使用できないので階段を上っていくと、倒れた鉄製のボンベから気体が漏れていたり、保管庫の警報が鳴りっぱなしの部屋もあり、上層階に行くほどに悲惨な状況で、室内に入るのがはばかれるほどであった。幸いにも怪我をして取り残されている人がいないことを確認後、震災当日の業務を終了して解散となった。地震発生直後から周辺の道路が渋滞していたこともあり、自動車をあきらめて真っ暗な道を歩いて帰宅した。途中で立ち寄ったコンビニでは駐車場にとめた車のライトで店内を照らしながら営業しており、客でごった返していたが、食料品はほ

星陵体育館避難所の一週間

永富良一
医工学研究科（健康維持増進医工学研究分野）
医学系研究科（運動学分野）

3月11日午後2時46分、4号館5Fで、洗濯機でかき回されるような、いつまでも続く大揺れに襲われました。30年以内の発生確率99%の宮城県沖地震とうとう来たかと思いました。揺れとともに飾り棚の中の置物が棚から落ち始めました。必死に扉をおさえ、飾り棚が転倒するのを防ぎました。あとから考えると棚そのものは壁に固定されており、押さえる必要はありませんでしたが、激しい揺れにそのようなことに気づく余裕はありませんでした。倒壊も覚悟しましたが、気がつくとかげはありません。携帯は全く使えません。非常ベルがなりひ

とんど残っていなかった。

翌3月12日からは、全国の皆様からの暖かい心のもった支援物資や研究科独自で調達したものも含めて、大量の物資が大型トラック等で研究科に送られてくるようになった。財務室を中心に事務職員が一丸となって、連日、そしてときには早朝から物資の搬入・搬出の作業に当たった。この度の地震では、研究科内での負傷者はいなかったため救護活動などをする必要がなかったが、その後の支援物資の搬出入等に多くの労力が注がれた。保管場所が満杯になってしまい、玄関ホールまでを埋め尽くすほどの膨大な量の支援物資であったが、その大半が沿岸部の被災地に向けて搬出され、日に日にその量が減っていった。

本研究科では、地震発生後から「防災対策マニュアル」ののっとなって災害対策を行ってきた。このマニュアルは災害発生時の通報連絡、被災者対策、消火・物資・被災施設対策、学生対策等の業務について、職員が何をなすべきかを簡潔に記載しており、近い将来発生する確率が高いと言われていた宮城県沖地震を想定して整備されてきたものである。勤務時間外の災害対策についても触れており、地震が発生した場合、その震度の度合によって職場に参集する体制についても詳細に取り決めている。当然ながら今回の地震では大いに役に立った。マニュアルの整備とそれに基づいた防災訓練を定期的の実施すること、さらにマニュアルの内容を全員で確認しておくことが、いかに重要かを今回の地震が改めて認識させてくれたと思う。

びき本棚から飛びだした本や資料に埋まった研究室を出て、倒れた冷凍庫や実験器具で足の踏み場もない実験室と机の袖の引き出しが全て飛び出た大学院生室で教室員の全員の無事を確認。ガスの元栓の確認後、全員で建物を退去しキャンパス中央にある事務室に向かいました。当初5号館玄関前に集合との指示がありましたが、雪がちらつく中、各研究棟から少しずつあふれ出した人を収容する場所はなく、3時半ごろようやく1号館玄関ホールに災害対策本部が設置され、各棟の安否確認がはじまりました。エレベータに人が閉じこめられているという話しも聞きました。4号館に戻り再度全フロアの安否確認を行うとともに、1号館に集合することを伝え、4号館に戻りました。キャンパス内全員の無事が確認され、ひとまずほっとしました。バーチャルな組織での連絡網も重要ですが、建物毎の緊急連絡網や避難訓練があった

方がよいと思いました。

当日は朝から気温が低く、天気予報通り雪が舞い始めました。断水と停電、本部に設置したラジオからの情報は断片的でしたが、大震災であることは間違いありません。自宅は心配でしたが、まずはキャンパス内の被害状況の確認と対応が先と考えました。家族への携帯電話はもちろんつながりませんでした。キャンパスでは安否確認後帰宅した学生・職員もいましたが、行き場のない職員や学生の人数はどんどんふくらんでおり、1号館玄関ホールには収容しきれません。そこで星陵体育館の状態の確認に行きました。幸い落下物もなく、問題なさそうでした。本部に戻り、再度吉田事務長以下事務スタッフで体育館の安全確認を行い、行き場のないキャンパス内の人員を収容することになり、誘導を開始しました。体育館に避難することになった分子病態治療学分野の段孝先生、公衆衛生学分野の柿崎真沙子先生、ラジオアイソトープセンターの本橋ほづみ先生に体育館避難者のお世話をお願いし、また行き場のない留学生も少なかつたので運動学分野（医工学研究科）牛凱軍先生に体育館に避難した留学生のお世話をお願いしました。丁度そのころラジオからは仙台市沿岸部が津波に襲われ荒浜で200名以上の遺体が発見されたというにわかには信じられないニュースが聞こえてきましたが、半信半疑でした。

17時をまわりキャンパス内が落ち着いたことを確認し徒歩で北六番町通りを東の方に向かい東照宮の自宅マンションに戻りました。信号機は停電で至る所に交通渋滞が発生し、堤通雨宮町の交差点では数カ所道路から噴水のように水が高く噴き出していました。しかし町並みは神戸の震災の光景と異なり、建物の倒壊は一軒も見当たらず、自宅マンションが遠目からも無事に立っているのを見たときにはほっとしました。ただし東方の空にはキノコ雲のような巨大な黒雲が見え、仙台港付近がただ事ではないことがわかりました。後日全壊と判定される自宅マンションに近づくと壁には大きな亀裂が入り、倒壊はしていないものの大きな被害を受けたことがわかりました。道中携帯メールが着信し家族の無事が確認できほっとしたことを覚えています。しかし自宅はドアが開かず、壊れた窓からようやく侵入できるような状態でした。無残な姿になった家具や食器で足の踏み場もなく、しばらく近所の中学校の避難所での生活を余儀なくされました。

翌12日、13日は自宅に散乱したガラスや壊れた家具を少しずつ片付けながら、午後は大学に顔を出しました。

週が明けて14日月曜日が来ました。障害科学専攻のリニューアルを記念したシンポジウムが開催されるはずでしたが、それどころではありませんでした。幸い私の研究室がある医学部4号館は建物の構造的な被害は軽微で、おそらく一番先に安全に立ち入りが可能とされる緑色の張り紙が張り出されました。14日の昼に医学部大会議室で緊急対策本部会議が開催されました。会議後、4号館ではオフになっていたブレーカーをオンにし無事通電することができ、医学部のメールシステムも復旧しました。この後、大学院生数名が研究室に寝泊まりし、教室員の安否確認を開始しました。

キャンパス内の学生・職員が避難した星陵体育館には100名を越える避難者があり、近隣住民の方も避難されているとの情報もありました。震災翌日の12日から体育館避難者の保健学科の大久保宗太郎君、医学科の栗島宏明君、高橋誠君、藤田剛君をはじめ10名あまりの学生諸君がアパートから食材を持ち寄り炊き出しボランティアを開始していました。おにぎりをにぎり、2つのいも煮鍋で10食以上の炊き出しを1日1回夕方に行い、余ったおにぎりを翌朝に回していたそうです。13日日曜日には電気が復旧したため、炊飯器5~6台で昼にごはんと前日の鍋の残りを味噌汁、夕食に生協から提供されたカレー鍋3つ分とご飯70合の炊き出しを行ったそうです。体育館の水道は井戸水のため、電気さえ復旧すれば冷たいのさえ我慢すれば問題ありませんでした。避難者の出入りについては入り口のおいた紙に名前を書き、退出時に線を引くことにしていました。

しかし避難生活が長期化することが必至の状況の中、100名を越える人間の食料をはじめとするライフラインの確保には、きちんとした管理を行う必要が出てきました。医学部では、東京で帰宅難民化していた宮田敏男教授が東北大学東京本部に詰め、被災地の後方支援に当たっている大学病院と医学部に食料をはじめさまざまな物資の調達および輸送に奔走していました。物資には限りがあるため近隣住民の方については、できるだけ仙台市の指定避難所を利用していただくことにし、原則として星陵体育館は星陵キャンパスの学生・職員の避難所とすることが対策本部会議で決定しました。苦渋の決断でした。元々炊き出しボランティアの大久保君、栗島君、高橋君たちは、近隣の子供達がひもじい思いをしないように自分たちの持っている食材を役立てようとはじめたことだったとのこと。その思いをあえて曲げてもらうのは大変心苦しかったのですが、見通しのつかない中、大久保君たちには不承不承承知してもらいました。早速、

灯油をほとんど使い切った体育館に借り上げた布団を150セット搬入し、星陵体育館の管理も、段、本橋、柿崎、牛の4先生だけではなく、医学系研究科の堀井明教授、高橋明教授、佐藤喜根子教授、平野かよ子教授、小林光樹教授、福島浩平教授、乾匡範講師と私が輪番で後方支援を行うことになりました。避難者を限定することを条件に、プロパンガスを使用している生協の炊飯器を利用し、生協で保存している食材も提供してもらえることになりました。また不足の物資、たとえばおにぎりにぎるためのサランラップ、米、食材、女性用衛生製品などを東京事務所を通じて病院支援物資と一緒に送ってもらう手配も行いました。その後、現在の避難者に趣旨を説明し、ご理解いただくよう働きかけるとともに学生については、可能であればできるだけライフラインが確保できている実家や親族宅への移動を勧めました。医学系研究科・歯学研究科以外にも農学、工学など他研究科の大学院生、アパートを探しにきた春に入学する予定の学生とそのご両親もいらっしゃいましたが、水曜日までは他研究科の学生や新入学生のご両親は学生さんたちに感謝しつつ離れていきました。

このようになんとか船出をした星陵避難所にもいろいろなハプニングがありました。14日昼には炊き出しを行っていることを聞きつけた病院職員の方が数名体育館を訪れ、病院では職員はカップラーメンしか食べていないから、なぜ病院に食事を提供しないのかと何も聞いていない学生に詰め寄る場面があったとのこと。病院長を通じて病院職員には東京本部からの食材を医学部本部から運ぶことを伝えなんとか収まりがつかしました。15日には体育館から突然電話工事が始まったとのこと、同時に河北新報には星陵体育館が避難所一覧に掲載されているとのこと。広報室を通じて、星陵体育館は一般避難所ではないことを申し入れました。電話工事はこの時点では結局誰が依頼をしたのかわからずじまいでしたが、工事担当者に聞いたところ、無料で市外にもかけられ、誰が利用してもかまわないとのこと。避難者の皆さんは多いに助かったことと思います。結局翌16日、この電話はNTTが指定避難所に無料で設置してまわった支援の一環だったことがわかりただ感謝あるのみでした。さらに15日の夜には、大学病院にヘリコプター搬送された津波被災地の家族の方が大学病院の看護師さんとともに寝泊まりの場所がないので泊めてもらえないかと訪ねてきました。杖をついた膝の悪い方でした。ただし元々外部の方は受け入れないということと、またこの時点では灯油がほとんど残っていませんでした。そこで急ぎ市の

指定避難所である近所の第二中学校避難所に自転車で走り、趣旨を説明し、なんとか受け入れてもらいました。第二中学校の体育館は、まだ灯油があったようで、とても暖かでした。

さてそうしているうちに最後の問題が起こりました。大学病院放射線部では、福島県から被爆の疑いがあるため検査および除染が必要な避難者を受け入れていました。ただし除染が必要な人数が次第に増えてきており、放射線部では手狭で、対処しきれなくなっているとのことでした。白羽の矢がたったのが星陵体育館です。結局17日木曜日までに避難学生には退去してもらうことになりました。元々できるだけ星陵体育館は一次避難場所であり、一段落ついたらさらに安全な場所に移動することになっていましたので、学生さんたちにはすんなり納得してもらいました。留学生は水曜日の時点では、ほとんど各国大使館からの通達で続々と母国に引き上げていましたので問題になりませんでした。1名だけ本学法学部卒業と名乗る方が最後までなぜ移らなければならないのか、布団をもらえないのか、星陵体育館は他の避難所より食事が充実しているから他へ移るのはいやだとなかなか納得してもらえませんでした。除染が必要な方のお話をして、なんとか納得してもらいました。結局、3月17日木曜日13時をもって、全避難者が無事移動を完了し、星陵体育館は約1週間の星陵地区臨時避難所の役割を終えました。

大久保君、栗島君をはじめとする医学部保健学科・医学科・歯学部の学生ボランティアの皆さんには、自身も被災者である中、一致協力して他の学生・教職員あるいは周辺住民の支援にあたり、最後の撤収・片付けまで整然とした行動をとり、まさに賞賛に値する活動だったと思います。思いとは一致しないことがあったとは思いますが、深く感謝しています。かくいう私も、涙がでるほどおいしいカレーライスをごちそうになりました。また星陵体育館に支援物資を届けていただくなど、さまざまなお世話をいただいた渡邊芳男室長および星陵体育館事務の斉藤裕彦さん、鎌田茂さんに深く感謝を申し上げます。

もうすぐ1年になります。犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈りするとともに、震災で気がつかされた人々の絆が、東北と日本の力強い復活につながることを願い星陵キャンパスの貴重な経験をご報告します。

星陵体育館避難者人数の推移

(名簿に記載されていた一時避難も含めた人数)

3/11 213名
3/12 記録なし
3/13 152名
3/14 143名
3/15 129名
3/16 121名

なお以下は運動学分野（医学部4号館5F）の大学院生神谷卓真君が、研究室の災害対策本部を設置し、同じ大学院生の藤原誠助君とともに、研究室メンバーの間の情報共有に献身的な努力をしてくれたメール配信の記録です。他の部局とは異なり、星陵キャンパスでは、震災3日目の14日はメールサーバーが稼働していたことが幸いしました。個人名は一部削除させていただいています。神谷卓真君、藤原誠助君に感謝いたします。

3月14日（月）（第1報）

- ・医学系の災害対策本部が設置され、本日、以下のことが決定したので報告いたします。
- ・毎日13:00より永富先生から運動学研究室で東北大学の会議内容を報告していただきます。
- ・医学系の災害対策本部は1号館2階に設置されています。
- ・大学は、4月下旬まで休校になります。そのため、帰省できるのであれば帰省したほうがよいそうです。
- ・卒業式、学位授与式は中止になります。
- ・各種手続きについては、まだ未定ですが期日を延期し、学生に不利益のないように対応して下さるそうです。
- ・今後余震等で電気が切れた場合には、不用意にブレーカーを上げないでください。対策本部に報告して指示を仰いでください。ブレーカーを上げた際に、すぐ下がる場合には、漏電している可能性があるため、下ろしたままにして、対策本部に報告してください。
- ・漏水も注意してください。
- ・星陵体育館で1日に2回炊き出しを行っています。食事に困った人は来てください。（ボランティアも募集しています！）
- ・現在の運動学研究室は、電気はつながりますが（いつ切れるかわかりません）、水は体育館（井戸水）のものを利用しています。ネットはつながります。
- ・それでは、また明日ご連絡いたします。
- ・「ここ一週間を乗り切れば、先が見えます！！」by 永富

3月14日（第2報）

- ・現在連絡の取れていない方の一覧をお送りします。（震災時研究室にいた方を含む）
- ・連絡を、EASTに登録しているアドレスと、今把握できる範囲での携帯アドレスに送信しています。（携帯アドレスはBCCで送っています）
- ・震災の影響により、PCのメールが見れない方が多くいるため、連絡メールを確認できていない人がいます。携帯の連絡先が分かる人には、連絡メールを転送してください。また、携帯に連絡を入れていただきたい方は、アドレスを送ってください。

<連絡の取れていない方>

（13名 名前省略）

以上（敬称略）

よろしく願いいたします。

3月15日（火）（第1報）

東北大学運動学の関係者各位

本日の連絡事項を送ります。ご確認よろしく願いいたします。

- ・ライフラインや食事等で困ったことがあれば相談してください。研究室では、水道も復旧しました。
- ・医学部1号館前で昼に1度炊き出しを行うので、食事に困っている方はいらしてください。
- ・仙台市内では配給が少ないですが、大学病院から石巻・気仙沼等に応援に行っている関係で、少なからず物資はあります。
- ・安全を確保したうえで、可能であれば研究科の復興のために力をかしていただければ幸いです。また、このような状況ですが、時間があれば論文・研究等を進めてください。
- ・EASTで、星陵対策本部の会議の議事録がアップされるので、詳しくはそちらをご覧ください。

<福島原発に関わる情報>

- ・放射性物質が飛んでくる可能性があるため、外出は控えてください。（特に雨の日）外出した際は、シャワーを浴び、服はすぐ洗うか袋などに入れるようにしてください。
- ・40歳以下の方は、ヨウ素（海藻、うがい薬などに含まれる）を摂取すると、放射性物質が甲状腺に取り込まれることを阻害するため、甲状腺がんの効果があるそうです（注・その後うがい薬は不適切であることが判明）。ヨウ素の半減期が8日なので、それを考えて注意して摂取するようにしてください。

- ・アメリカでのニュースでは、今回の事故はチェルノブイリ型の炉心溶融で、メルトダウンの可能性があるため、即刻非難すべきだと報道されているそうです。また、日本政府からホワイトハウスに炉心冷却の応援をしてほしいとオファーを出しているようです。

「身の安全を第一に！」 by 永富先生

3月15日(火)(第2報)

東北大学運動学の関係者各位

- ・一号館前の炊き出しは今後も行うことを検討しているそうです。また、それに関わる物資については、決して石巻・気仙沼等への救援物資をいただいているわけではありません。東北大学東京本部からの援助だそうです。
- ・訂正および不適切な表現があり申し訳ありません。

3月16日(水)(第1報)

東北大学運動学の関係者各位

- ・本日(3/16)の研究室での対策会議は17時から18時から行います。永富先生が15時から教授会があるので、その後行うそうです。
- ・雪も降っていますので、参加する方はお気をつけてお越しください

3月16日(水)(第2報)

- ・xyzさんと連絡ができました。
- ・訂正した運動学関係者の安否確認リストを送り知ります。

3月16日(水)(第3報)

本日の連絡事項を送ります。ご確認よろしく願いいたします。

- ・現在の仙台市の放射能レベルは身体に問題のないレベルだそうです。今後も放射能レベルは測定していくそ

うです。以下に各放射能レベルの身体に与える影響を記載します。(単位注意)

- 外出禁止基準：5 μSv/h
- 屋内退避基準：500 μSv/h
- 胎児異常 100 mSv
- 致死 5 Sv

- ・先日、甲状腺ガンに効果的なヨウ素を含むものうがい薬を入れましたが、ヨウ素以外の成分も含まれており危険ですので飲まないでください。
- ・仙台市ではヨウ素を常備しているそうなので、緊急時には支給されると考えられます。
- ・星陵体育館の避難所は明日(3/17)に閉鎖されます。
- ・なお、研究室に泊りこんでいた藤原&神谷は避難することになったので、明日以降は永富先生がメールで連絡して下さります。

「避難する時はどこへ行くか連絡を入れること！」 by 永富先生

3月16日(水)(第4報)

東北大学運動学の関係者各位

- ・EASTにアップされていたものですが、福島原発に関する大学からの情報です。参考にしてください。
- ・～読めない人のために結論だけ～
- ・発電所の近くまで行かなければ、問題ない
- ・発電所の近くでも、マスクをして、長袖のシャツを着て、帰宅したら手、シャツを洗えばよい
- ・政府の発表は信頼できる
- ・At this moment, we are safe unless we go near the nuclear power plant.
- ・Even if we are near the nuclear power plant, there is no problem if we wear mask and long-sleeved shirt, and wash our hands and shirt when coming home from outside.
- ・We can trust the information announced by the Japanese government. とのことです。

星陵地区避難所：留学生の状況なども含めて

牛 凱軍

医工学研究科健康維持増進医工学研究分野准教授

小学校1年に入学する直前のことでした。唐山大震災(中国河北省唐山市付近/マグニチュード Mw 7.5/直下型地震)が夜中に突然発生し、自分の家を含め周りの建物のほとんどが崩壊しました。何日も道路の真ん中に座

り込んで過ごし、「咸鴨卵」と「饅頭」を母に抱かれて食べたことを小さいころの記憶として一番印象深く覚えています。

研究の世界をもっと知るために、阪神・淡路大震災から2年半後の1997年8月に兵庫県にやってきました。当時、震災の状況を目にすることは全くありませんでしたが、震災時の惨状をよく耳にしました。

まさか自分の周りで3度目の大震災が発生するとは思

いもしませんでした。

2011年3月11日の昼すぎ、いつものように研究室で仕事をしていたところ、突然激しい揺れを感じました。日本に来る前、日本が地震大国であり平均して1分間に4回の地震が発生していることを教科書で覚えました。日本に来てからもかなりの頻度で地震の発生を感じていましたが、今回の地震は今までの地震とは違うということとその揺れからすぐ判断できました。本棚に並べてあった本のほとんどが落ちて、まるでゴミ捨て場のように私の足元をあっという間に埋めてしまいました。携帯電話も本の下に埋もれてしまい、見つけるのに30分かかりました。電気もすぐに止まりましたが、幸いなことに建物自体には何の損傷もありませんでした。余震を恐れて皆と一緒に急いで建物から出、広いところで立っていました。

自宅(大学の寮)はまったく被害はありませんでした。教官として盗難や火災などの防止のため、常に大学を巡回する必要があると教授に言われ、留学生を含めた避難者たちと一緒に避難所(大学の体育館=星陵体育館)に泊まることにしました。

初日の夜が一番大変でした。3月11日の気温は最高気温が6.2℃で、最低気温は-2.5℃でした。夜の10時前後、あまりにも寒くて留学生の友人と一緒に家へ毛布などの寝具を取りに戻りました。翌日には寝具が沢山運ばれてき、ようやく安心して避難所に泊まることができました。しかし初日の寒さだけでも私を含めた何人かの避難者は鼻水が大量に出てくることになり、その中の一人は高熱も出てしまいました。翌日の12日からはたくさんの留学生から連絡が入り、みんな星陵体育館へ集まってきました。20人を超えていたと思います。避難している留学生たちは、家が壊れて泊まる場所がないというよりは余震を恐れて、避難所の方がより安全だと思う人がほとんどでした。寝具、食べ物、炊飯器、ポットなどを持参し避難所はすぐにぎやかになり、留学生たちは集っていろいろなことを話しているうちに安心感が高まったせいか笑顔も出始めたことを覚えています。ところが、こういった風景は長く続きませんでした。福島第一原発事故のニュースが避難者たちの中で広がり、地震よりも目に見えない放射線の恐怖がみんなの心を再度襲いました。不安はどんどん高まる一方でした。話す内容もだんだん変わり、原発事故のことばかりになりました。そして地震発生から4日目の14日に、半数以上の留学生たちが避難者集団からいなくなり、翌日の15日に残ったのは私だけでした。もちろん日本人の学生たち

もそれぞれの地元に戻ってしまい、夜、避難所に泊まったのはわずか10数人しかいませんでした。地震だけあればこんなことになるわけがないと思いました。その後、福島県から避難者がやってきて体育館を利用する可能性があるといわれ、避難所は1週間を待たずに閉鎖されました。

今でも道を歩くおり、周りの古い建物を見ながら地震のことを思い出します。小さいころに経験した地震に比べると倒れた建物は一軒もなく、地震自体の酷さは「天と地の差」だと思いました。地震よりも福島第一原発事故への心配がニュースや世論調査により明らかにされています。留学生たちも例外ではありません。「ひとたび去って再び返らない」留学生がいることもよく耳にします。いろいろな事情で幼い赤ちゃんを連れて帰ってきた留学生もいましたが、会うたびに放射線への心配を口にしてはいますが、放射能への知識はほとんどありません。ちょっとインターネット(Amazon)で震災後に出版された「放射能」に関する「一般向けの科学読み物」を検索してみました(キーワード:放射能<<2011年3月以后>>)。7月6日の時点で既に46冊出版されました。分かりやすそうなものを3冊、下に紹介します:「① ニュースを正しく理解する放射能キーワード70 知っておくべき用語を分かりやすく解説 サイエンスライターズ・クラブ(新書-2011/6/23); ② 世界一わかりやすい放射能の本当の話 完全対策編 青山智樹、江口陽子、加藤久人、合力 次郎(単行本-2011/6/25) 新品:500円; ③ 世界一わかりやすい放射能の本当の話 青山智樹、江口陽子、加藤久人、斉藤勝司(単行本-2011/4/20) 新品:500円」

基礎から予防策までたくさんの図を入れて一般市民でもわかりやすく工夫されています。ところが回りの留学生に聞いたところ、こういった情報を知っている人は一人もいませんでした。もちろん購入し読んでいる人もいません。留学生は小さいころから日本に住んでいる日本人に比べ、情報源を素早く正確に把握できないのが一つの原因ではないかと考えています。こういった事情から、留学生向けの放射能(地震・津波)の基礎知識及び予防策の出版物を発行・配布することが、より被害を少なくし、そして安心して勉強・研究に専念できることに役立つのではないかと考えています。

3回も大震災に会った私は運がいい人間なのか、運の悪い人間なのか、考えることがありますが答えはまだ出ていません。なぜならば生きているからです。大事なものはまさに生きてることだと考えました。大震災の復興

という大きな課題のほかにも更に大事なことが我々の解決を待っていると考えています。もっともっと高い目標に向かって常に精一杯頑張っていくことが、まさに「大震災」のような「影」から脱出するただ一つの方法では

ないかと思います。留学生たちが本業を忘れずに必死に学び科学技術を身に付けて、母国や世界の発展に貢献するよう心から願っています。

(2011年9月2日 東北大学)

震災後の1週間

柿崎真沙子

東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野・助教

2011年3月11日午後2時46分。私は医学部図書館2階の職員用閲覧室にいました。あまりの揺れに揺れが弱くなったあともしばらく呆然と動くこともできませんでした。収まった直後に図書館の職員の方が「誰かいませんか!」と見回りにこなければ、外へ避難することもできなかつたかもしれません。その後、公衆衛生学分野のある医学部5号館付近で教室員の皆と合流しましたが、余震は一向に収まる気配もなく、強い揺れが断続的に続きます。ようやく落ち着いて一度研究室に戻ったものの、あまりの惨状に言葉が出ませんでした^(写真)。

地震発生日の夜は、自宅マンションの水漏れもあり、余震が収まる気配もないため、同じ建物の方とともに近所の避難所で一晚を過ごしました。医学部1号館付近で学生が夜をあかしているというメールはもらっていたのですが、移動する気力もありませんでした。翌日朝からは医学部体育館に移動し、体育館で4、5日ほど過ごしました。医学部体育館は断水もせず、電気も12日夜中に回復したため、最初の晩に過ごした避難所に比べてもかなり恵まれた状況でした。しかし、避難者が少ないためか体育館全体は非常に寒く、指定避難所ではなかったため食糧調達も自力で行うしかありませんでした。どうしようかね、と周りの方と話していたところ、土曜の夜

には有志の学生を中心に炊き出しが始まり、日曜朝には学生のアルバイト先からの差し入れの朝食が振舞われました。その後も、自宅電気が回復しない学生の冷蔵庫の中身を持ち寄り炊き出しが行われ、地震発生後2、3日すると大学から食材の配給が始まり、学生有志によって交代で当番が組まれ、昼食と夕食が振舞われました。研究室の片付をしながら、教授や学生とお昼をごちそうになり何度か体育館に足を向けました。最初の頃はスーパーにも大行列だったため食料調達が大変で、この炊き出しがなければろくに食事を口にすることも出来なかつたでしょう。また、12日夜にはどこから大量のレンタル布団が送られてきたため、寒さに凍えることもなくなりました。ダンボールの上に直接寝るか、良くて体育用マットの上に寝ていたので、とてもありがたかったです。

医学部体育館の運営主体は学生だったこと、昼夜を問わず常駐する職員が少なかったこと、名簿も整備されておらず誰がいるかもわからなかつたこと、炊き出しの学生が張り切りすぎて疲れてしまうのではないかということ、また、上記のような理由から大学関係者以外が紛れ込んでしまい何か問題があると大変なのではないかと初期から非常に心配していました。私自身も自分の職場があるため体育館に日中常駐するわけにも行かず、どうしたものかと思っていましたが、月曜日からは交代で大学職員が常駐していただくことになり、大学関係者以外の出入りをチェックしていただいたり、名簿も整備されはじめ、学生の炊き出しも交代で行うようになるなど、徐々



震災直後の公衆衛生学分野図書室。
本でドアが開かない状況であった。



震災直後の公衆衛生学分野研究室。

に状況は改善して行きました。最終的には震災後約1週間で、星陵体育館の避難所は解散し、学生は自宅や実家・親戚宅へと帰り、私も友人宅に身を寄せました。

今回の震災を受けて今後の避難訓練では、今回のような状態（ライフラインの寸断、交通機能の麻痺、大津波警報の発令など）になったことを想定し、建物から外に「避難」するだけでなく、その後の体育館の開放や、避難者名簿の作製・整備、非常用食品等の備蓄・配布などに関するその後の手順に関しても訓練を行ったほうが良いのかもしれない。特に、今回のように沿岸部に津波が押し寄せるといった状態になったとき、地震直後に職員や学生を帰宅させていたら、沿岸部に自宅のある者は間違えれば津波の犠牲となっていた可能性も否定できません。また、今回は学生の機転や頑張りで、星陵体

星陵体育館での炊き出しについて

栗島宏明
医学部医学科6年生

3月11日、未曾有の大震災が東日本を襲った。電気、ガス、水道、全てのライフラインが止まり、携帯の通信も途絶えた。何が起きているのか完全に理解することもできずにその日は不安な夜をすごした。次の日になってようやく思ったより状況が悪いことを理解した。しばらく食料が手に入るかどうか分からない状況だったからだ。私たちが星陵体育館で炊き出しを開始したのはそんな自分たちの状況を理解しだした震災の翌日である。スーパーの食料を求める長蛇の列に並んでいたとき、所属する軽音学部の後輩であった大久保に「体育館にいる子供たちに温かいものを食べさせたいので手伝ってもらえますか」と声をかけられた。そんな余裕が自分たちにあるのか疑問であり、不安に思ったが、こういふときだからこそその役に立つことをしたいと思い、協力させてもらうことになった。

夕方から炊き出しの準備は開始された。電気が止まり、冷蔵庫が使えなかったため保存が利かない食材をみんな持ち寄り鍋を作ることになった。程なくして鍋は完成し、星陵体育館で避難生活を送っている人たちに振舞われることとなった。3月の雪が降るほどの寒さの中、暖房もなく生活していた我々にとって、冷えた身体に染み渡る非常に美味しい食事だった。あの味は今でも忘れられない。更に、みんなで協力して行ったことで、いつまでこの状況が続くかも分からないという不安を忘れるこ

育館において炊き出しなどが行われましたが、同様の事態が起こった際、今回同様に物事がうまくいくとは限りません。特に医学部の職員の一部は大学病院の職員も兼務しているため、他の学部・研究科とは状況が異なることが考えられ、有事の際の役割分担も明文化しておいたほうが良いのではないかと思いました。

東京ディズニーリゾートでは、小規模なものを合わせて実に年間180回もの避難訓練を行うそうです。そのため、今回の震災への対応も非常に良かったと報道されていました。年間180回とはいかないとは思いますが、東北大学医学部においても今回の震災を教訓として、有事の際の更なる対応マニュアルの整備と、避難訓練の更なる強化がなされることを期待します。

ともでき、また、多くの方から感謝のお言葉も頂き、心も温まる炊き出しのスタートだった。

嬉しいことに我々の決して上等とは言いがたい鍋を食べた方々からたくさんの食料支援が集まった。それからの炊き出しではそれらの食材を使わせていただくことになり、次の日からは我々の仲間内だけでなく、体育館にいる全員の協力の元、炊き出しは毎日行われた。そこにはお話ししたことがないことはもちろん、お会いするのも初めてであるような一般の方もいらっしゃった。中には「自分たちで食料は確保できているので、他の方にもっと食べさせてあげて欲しい」というような形で協力していただける方もいた。大変な状況に立たされた中、譲り合いの精神、みなで助け合っていく、そんな避難生活が星陵体育館では当たり前のように成り立っていた。

更にはその活動に目を付けていただいた大学からバックアップをしていただくことが決定し、食料の他、布団やマスクなど避難生活において必要なものを可能な限り提供していただけることになった。一人の優しい心から生まれたほんの小さな活動が、大学まで巻き込む大きな活動になった。我々の活動は「子供たちに温かいものを」というところから始まった、言わば責任を伴わない勝手な活動であったため、大学のサポートが入り責任が増してきたため、その定義を変え、しっかりと決める必要があった。そして「星陵地区の学生、職員のための炊き出し」へと方針を転換した。それまで星陵体育館で過ごされていた、医学部の関係者でない方々にはなるべく次の一般の方向けに解放されている別の避難所を提供し、行き先の見つからない人とはその後も協力して生活を送る

ことになった。

定義付けの無いままスタートした際には、食材にも限りがあり、どなたに食事をお渡ししてよいかがあやふやなままであったが、永富先生、堀井先生始め、大学の先生方と協議を重ね、病院スタッフ除く、医学部の教職員、学生に食事を振舞うことになった。しかしながら、私たちは困っている人を助けたいという思いがあり、なるべく多くの方に食事を提供したかった。それは大学の先生方も同じであったため、困っている人には我々の活動の対象以外の方であっても、食事をもらいにきた方には、そのような関係者のみに食事を渡しているという事情を説明しつつ、そのときに限って食事をお渡しするということになった。限られた物資の中で、可能な限りの炊き出しを行った。

我々の不安は先行きの見えないこと。いつまでこの生活を続けなくてはならないのか。食料はどれほど確保できるのか。原発の影響は。我々にはわからないことが多すぎた。そんな中、星陵体育館には大勢の方がいた。みんなで持ち寄った食材があった。みんなで協力して食事

地震について

大久保宗太郎 医学部保健学科2年生

大きな災害は人の素の部分を見せてくれる。この地震を通して感じたことです。

僕は地震の時、体育館で所属しているバレー部の練習をしていました。次の練習に移ろうというときに地震は起こりました。軽い地震かと思っていたら、携帯電話の緊急地震速報が鳴り、次第に立っていられなくなり、すぐに外に飛び出しました。体育館のすぐ隣に建っている塔の様なものが見たことも無い角度で揺れていたのを感じています。初めて「死ぬかもしれない」と明確に感じた瞬間でした。その後地震が収まり、私たちは一旦帰宅することになりました。その日の夜は所属する医学部軽音部の人たちと集まって過ごしました。ちょうど家に強い酒（スピリタス）があったので、それで何とかアルコールランプを作ろうとがんばりましたが、ただ、ご飯茶碗を1つ丸焦げにただけでした。

地震直後、僕の携帯電話に様々な情報が入ってきました。特に印象的だったのが twitter に書き込みがあったのを先輩がメールで回してくれた物なのですが、それは阪神大震災を経験した方からのメッセージでした。「コ

を作った。助け合う心。「普通」ではなくなってしまう世界の中で人間の優しさがそこにはあった。もちろん、勝手に多くの食事を持っていってしまう人や何度も並んでいる人もいた。星陵体育館では発生しなかったが、火事場泥棒のような犯罪も世の中では起こっていた。しかしながら、あのような状況の中、大きなパニックになることもなく、スーパーに並び、決められた制限の中食材を買い、譲り合い、協力し、助け合う。多くの人がそれを行い、あの場をしのいだことは本当に素晴らしいことに思う。

星陵体育館での活動は我々が中心となって行われていたことは事実であるが、体育館で避難生活を送っていた方々全員の協力、そして東北大学医学部の協力があったことにより、成り立っていた。事情により1週間程度で星陵体育館は避難所としては閉鎖されることになってしまったが、震災後の先行きが見えず一番不安だった状況を、大勢で協力して打破し、感じたことは、今後の人生の大きな糧になると思う。

ンセントを抜け」「水が出るうちに風呂桶に水をためろ」などが書いてある100文字程度のものなのですが、これのおかげで何とかトイレ用と頭を流す程度の水が確保できました。これの元のメッセージを流した人には是非会って目の前で感謝の言葉を言いたいです。

次の日、食料の買出しをしようと思い近くのスーパーに向かいました。もうかなりの人が並んでいて、1人何個かという制限がありながら購入していました。というか、あの時のスーパーの店員さんたちには本当に感動しました。あんな状態の中、自分たちのやるべきことをすぐに見つけて実行すること。誰でも出来るものではないと思います。

1件目のスーパーで買うことが出来た後、なんとなく体育館に寄りました。…子供がいるじゃありませんか。家から持ってきた毛布に包まって小さくなりながら座っている子供が2人いたのです。いたたまれない気持ちになって、体育館の管理人さんに買ったものをほとんど渡してきました。だって、子供がいるんですよ？次のスーパーに並んでいる時に、前の方から「売り切れました」という言葉が聞こえた瞬間「よし、炊き出しをしよう」と思い立ちました。すぐに知り合いにメールを流し、炊き出しを行う旨を伝え、僕は近くの八百屋に行き、有り金で買えるだけの野菜を買ってきました。バレー部に頼

んでバーベキューセットを貸してもらい、近くのスーパーに行って大鍋を貸してもらいました。医学部教務と消防署に行って体育館前で炊き出しを行う許可をもらいました。知り合いにどんどん連絡して、必要な材料をかき集めました。火を起こして鍋を作り、体育館は別電源で動いているようだったので炊飯器でご飯を炊き、おにぎりを作りました。まず、体育館にいる子供たちにおにぎり1個ずつと1杯の味噌汁を渡しました。「ありがとう」言葉を聞き、何かこみ上げてくるものがあり、1人で少し泣きました。道を行く人たちにおにぎりを渡して、何度も感謝されました。何度も何度も。

当初は緊急避難所として学外の方もたくさんいらっしやったのですが、1日～2日した頃に地震対策本部の意向で東北大学に関係する人しか使用できなくなりました。その後も僕たちは大学から米などを支援してもらいつつ、大学生協に厨房を借り、食料を分けてもらいながら炊き出しを続けました。しばらくして体育館を放射線の検査のために使用するとわれ、僕たちの炊き出しは終わりました。この期間内には見ず知らずのたくさんの方々を助けていただきました。この場を借りて心からの感謝をしたいと思います。本当にありがとうございます。

しかし、僕らの当初にあった大きなきっかけは「子供のため」なのです。炊き出しの最後の方は飯が出るのが当たり前かのごとく言う人も出てきました。僕としては星稜地区にいる全ての人に対しての炊き出しでした。いつの間にか給食と同じ扱いになってしまったことに少しだけ寂しさがあります。外部の人たちにも炊き出しを行う旨を教務に伝えた際、「大学は生徒を第一に考える」という理由でそれを断られました。確かに大学から支給された食料で炊き出しをしているのですから当然といえば当然なのでしょうが…。

地震という大きな災害において、学生がどうのとか、

ごんりょう

良陵新聞：3・11 震災特集号の発行

田代亮介

良陵新聞編集委員会 学生編集部

この度の震災で、被害を受けたすべての方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、一刻も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

震災後に、学生編集部および編集顧問の先生方と話し

所属が何だとか。そんなこと言っていられない状況だったんです。地震の次の日の朝からスーパーに人が並び、午前中で全て売り切れるのです。全ての人が生きるのに必死なのです。そんな時に上の都合で仲間内の人間しか助けられない。そんなことがあって良いのでしょうか。外部の人には炊き出しを行わないでくれと言われて後、僕たちはかなり落ち込みました。学校からの支援は僕らが扱うには莫大なものでした。そんなものを貰っておいで口答えなどできようがありません。仕方なく、僕らは通りすがった人を見つけてはおにぎりを渡すなど、他の人に見られないようにこそそとやっていました。自分は正しいことをしているのだと言い聞かせながら僕は炊き出しを行っていました。

ボランティアとはあくまで個人の意思に基づくものだと思います。他方からの力添えがあった時点でボランティアとは呼べなくなるのではないかと思うのです。僕は僕が最初に思い立ったときの、自分の私財を使って、自分の身を削って行うことがボランティアとして正しいものだと信じています。以前、僕が他の場所でボランティアの人たちを見たときに唖然としてしまいました。この人達は何をしているのだろう。遊びに来たのだろうか、と。ボランティアをしようと集まる人達はきっと善意で集まってきているのでしょう。しかし、善意のみで「何をしようか」という目的も無い行為はただの自己満足です。そんな外見だけのボランティアが地震後少し経ってから増えたように感じました。

この震災を通して様々なことを考えさせられました。社会、政府、生き方など、僕らが常に考えていかななくてはならないことを改めて認識させられました。震災で見えてきたものが沢山あるはずです。僕らはこれまで見ぬ振りしてきたものに、きちんと目を向けなければならぬのではないかと感じました。

合い、良陵新聞として何かしらの被災地支援をできないかと考えました。良陵新聞として、被災地に支援物資を提供したり、ボランティアを派遣するといった物的な支援や、石巻日日新聞のように最新情報を被災地域に提供したり、官公庁や関係学会に支援を働きかけるといった情報面での支援をすることはできませんでした。急性期にはこういった支援が必要とされましたが、震災後の亜急性期から慢性期へ入りつつあった状況もふまえ、我々にもできる被災地支援が何であるかを議論しました。悲

惨な被害をもたらした東日本震災は決して忘れてはならない悲劇であり、今回の大震災を後世に伝え、人類が二度と同じ失敗を繰り返すことのないようにしてはならないことは言うまでもありませんが、今回の震災に関する記録となる資料を作り、後世に語り継ぐことが我々にできる被災地支援であると同時に我々に課せられた責務であると考えました。そこで、東日本大震災による被災状況、震災後に各医療機関がとった対応、東日本大震災で浮き彫りになった問題点をまとめた「3・11震災特集号（長陵新聞第272・273合併号）」を発行する運びとなりました。

本震災特集号を編集するうえでは、①震災時に自らも被災され、震災後に地域医療を守るべく懸命に頑張られた先生方を直接取材し、震災当時の状況を正確に、そしてリアルに伝えること、②これまでの震災対策が活かされた点と今回の震災で浮き彫りになった問題点を明確にすること、③新聞やテレビなどの一般のメディアでは報じられていない、先生方や学生ボランティアの活躍を積極的に取り上げること、の3点に留意しました。記事内容としては、①東北大学病院および医学系研究科の被災状況と震災後対応、②宮城県内沿岸地域の石巻赤十字病院・公立志津川病院・気仙沼市立病院の被災状況および震災後対応・今後の方針、③緑の下で頑張ったボランティア学生の活躍を取り上げ、さらに、④震災を体験された読者からの寄稿を募り、⑤震災後慢性期に問題となる「心のケア」についても取り上げることとしました。具体的には、研究基盤に大きな被害が出た東北大学医学部・医学系研究科、沿岸被災地域の後方支援に徹した東北大学病院、津波の被害をまともに受けた公立志津川病院、石巻・気仙沼の各地域の最後の砦の役割を果たした石巻赤十字病院・気仙沼市立病院、震災後慢性期の「心のケア」対策に取り組む東北大学病院精神科への取材を企画しました。震災後対応に追われていた時期であったにもかかわらず、本震災特集号の趣旨を御理解頂き、先生方には快く取材に応じて頂きました。

我々が取材のために宮城県沿岸の被災現場へ伺ったのは震災から2〜3ヶ月が経過した、昨年5・6月でしたが、泥だらけになった駅前商店街、鉄筋のみがかるうじて残った防災庁舎、屋上に船や車がのっており床が泥だらけの病院、津波をかぶって高さ10メートルくらいまで変色した木が立ち並ぶ森林、魚の死骸で床が埋め尽くされた民家を目の当たりにし、言葉を失い、呆然と立ち尽くしてしまいました。また、自らも津波の脅威を目の

当たりにし、物資が何もない状況で懸命に医療活動に取り組まれた先生方からは、「身動きのとれない患者が津波に流されていく姿をただ呆然と眺めることしかできなかった」「通信手段が全て途絶えてしまい、自分たちが世の中から忘れられていないかと不安で一睡もできなかった」「がれきで周囲の道路がすべて寸断されてしまい、100メートルしか離れていないところの状況を把握するのに1週間かかった」といった体験談をお話頂きました。被災した先生方からのお話は、一般メディアで紹介されていた仙台平野を大津波が襲う映像や仙台空港が水没していく映像よりも、我々の心により強く訴えかけてきました。このリアリティーが少しでも読者に伝わるように、読者の心にも強く訴えかけるような記事を執筆するように心がけました。

今回の東日本大震災が、これまで想定されていた大震災とは全く異なる未曾有の大災害であったことは今更言うまでもありません。その一方で、取材先の先生方が共通して仰ったことは、「大震災を想定した準備や避難訓練をきちんとやってきて本当によかったと思っています。確かに、マニュアルが通用しない部分や想定外のことがあったのは事実ですが、日頃の訓練をしっかりとやっていたことが功を奏し、冷静に対応できました。職員は、指示がなくても、自らの責務を自らの頭で考え自発的に動いてくれました」「多くの支援ボランティアが現地入りして下さり非常に助かりましたが、地元の医師が、従来の医療スタッフとボランティアを統括し、人員を的確に配置したことで、病院と各避難所で継続的に医療を供給し続けることができました」ということでした。自らの死を覚悟するような状況のなか、我々の先輩である同窓生の先生方が、極めて冷静に自らの職責を果たし、地域医療を守り抜くべく奮闘されたことには、本当に頭の下がる思いになりました。このような先生方の御活躍と震災体験談を震災特集号で伝えました。

本震災特集号を発行するにあたり、大変御多忙のところ、多くの先生方に快く取材に応じて頂きました。また、多くの先生方に寄稿文を御投稿頂き、さらに、各部局より多数の写真を御提供頂きました。こういった御協力なくして、本震災特集号を発行することはできませんでした。御協力頂いた方々には、この紙面を借りてお礼を申し上げます。

本震災特集号が、当初の目標通り、記録として耐えるような紙面にすることができたとするならば幸いです。また、本紙面では今回の震災後の各医療機関の対応

を紹介し、従来の震災対策が活かされた部分と今回の震災で浮き彫りになった問題点を明らかにするように心がけましたが、今後、震災対策を見直す際の参考にして頂けたとすれば、我々良陵新聞編集委員会にとっては望外の喜びであります。

一方で、今回取材に伺うことができたのは、被災地域の一部の先生方・医療機関に過ぎません。また、被災地の復旧・復興には長い年月がかかることが予想されます。良陵新聞は、今後も引き続き被災地への取材を続け、震災の記録として後世に残すことのできる紙面作りを続けたいと考えております。

(良陵新聞「3.11 震災特集号」の一部記事を資料編に掲載)

2 度の震災の経験から、新しい日本の復興を目指して

清元秀泰

東北大学 東北メディカル・メガバンク機構
地域医療支援部門教授
東北大学病院 腎・高血圧・内分泌科

0. はじめに

2010年の猛暑の中、私は四国の地方大学で腎臓内科・透析部門のチーフとして悶々とした生活を送っていた。そんな折、伊藤貞嘉教授より「人間到處有青山（じんかんとおころにせいざんあり）」という短いメールを頂戴して、私は仙台への単身赴任を決意した。「人間には至るところに墓場とすべき青山があるのだ。男子たる者、自分のなすべき仕事のために命を懸けるべきだ」と。医者になった時に、私が東北大学に転勤する事など想像もしなかった。しかも単身赴任した仙台で2度目の大震災を経験することも想像もしなかった。私は運命論者ではないが、未曾有の大震災を2度経験することで、私はこれからすべき自分の仕事、つまり墓となるべき青山をこの東北に見つけた。本誌上をお借りして、私の2度の大震災の経験とこれから行う東北メディカル・メガバンク事業への思いを記したい。

1. 阪神淡路大震災と私

私は奇しくも2度も震災に遭遇した。前回の阪神淡路大震災では神戸の自宅を失ったが、幸いにも一族郎党に人的損失はなかった。1995年1月17日の阪神淡路大震災の発生時には私はテキサス大学に勤務しており、

良陵新聞は、東北大学医学部良陵同窓会の会員向けの同窓会新聞である。昭和34年4月1日創立。年4回発行、発行部数は約6,000部。これまでの発行部数は275部。同窓会新聞として、同窓会に情報を掲載するだけでなく、大学の近況や東北大学医学部関連施設の情報や、同窓生の近況を掲載している。医学部の同窓会新聞は、他の大学医学部でも発行されているが、本良陵新聞の最大の特徴は、新聞の企画・取材・編集をすべて本学の学部学生が行っている点である。利害関係に左右されることなく、学部学生の視点から事実を正確に伝えるだけでなく、良陵同窓会および東北大学医学系研究科・医学部の振興に資する新聞を発行することを目標としている。

実際、神戸での直接的な揺れを体験していない。しかし、一時帰国してみた長田界隈の悲惨さには息を呑んだ。

横倒しになった阪神高速道路の北4Kmにある私の家の周辺は、戦後の空襲後のようで、徒歩1分にある神戸電鉄（地下鉄）大開駅の天井は抜け落ちていた。神戸の家は全壊で、子供のころ見たテレビ（ドリフターズの全員集合）のセットのようなあつけないつぶれ方だった。町全体は埃まみれで、私の子供のころから慣れ親しんだ神戸の景色はなかった。程なく神戸市の職員が家屋全壊の判定を下した。簡単な所有権放棄の書類にサインをすると廃棄料は無料で、我が家はポートアイランドの沖合に投棄された。震災後に集められた瓦礫の山はポートアイランドの沖合で埋め立てられ、復興の名の下に神戸空港や先端医療センター病院や研究所に生まれ変わった。

今、私は単身赴任者として月1回は兵庫に帰る。街を見回してももう16年前の傷跡は残っていない。日本の叡智を結集してあの震災から復活できたのだから、東北が復興しないわけがない。

2. 3月11日の被災は四国だった

2011年3月11日の東日本大震災の時、私は四国にいた。世界腎臓病Day関連の市民公開講座を香川県で開催していた。転勤前にこのイベントは計画されており、幸か不幸か大震災が発生時はちょうど瀬戸大橋線の乗客の一人であった。列車が高松駅についた3時過ぎから、突然、携帯メールが洪水のように溢れはじめた。真っ先に来たのは、高校3年生の娘からだった。「お父さん、大丈夫？」と、そっけないメールである。しかし、彼女の学校では携帯電話は禁止である。担任の先生が震災の発生を知り、娘に私の安否を確認するように指示したら

しい。この時、私には何のことも解からなかったが、ホテルでテレビをつけた途端、映し出される光景は信じられるものではなかった。

テレビでは仙台空港が今、まさに津波にのみ込まれようとしていた。画面は切り替わり、気仙沼港の周辺施設を怒涛のような津波がのみ込む風景が飛び込んできた。人も建物も一瞬で喪失する瞬間を目の当たりにし、足が震え、胸は早鐘のように拍動した。もちろん、仙台の同僚や病院にはメールも電話も全く通じない。自分にできることは皆の無事を祈るだけである。私は講演の5分前まで、ホテルの部屋を動くことはできなかった。私は世界腎臓病 Day における市民公開講座の講師として、判りやすい言葉で市民に腎臓病を解説しなければならない。しかし、その時、何をしゃべったか覚えていない。自分の頭の中では、これからすべきこと、つまりどうやって仙台に戻ればいいのか、救援隊を編成するにはどうすればいいのか等、答えなき思考が頭の中をぐるぐると廻っていた。

講演終了後、すぐに関係各位と連絡を取ったが、仙台には依然、通信不能であった。更に、通信集中のために東京への連絡もままならなかった。東北大学医学部・医学系研究科の Web メールは機能しなかったので、連絡用に香川大学医学部の Web メールを復活させた。ようやく夜中になって、私の所属する腎・高血圧・内分泌科の同僚と連絡がついた。幸いなことに医局員、入院患者は全員無事で、病院の一部は壊れたが自家発電にて対応できているとのことであった。

夜になって、科長である伊藤貞嘉先生と連絡が取れた。伊藤先生は公務のために東京に出張されておりご無事を確認できたものの、東京のホテルで留め置かれている状

況であった。更に、研究科長の山本雅之先生、創生応用医学センターの宮田敏男センター長など、安否確認が取れる人はみな東京で、仙台への帰路のめどもつかない状況だった。仙台空港は津波にのみ込まれ、JR は全面停止状態、東北自動車道も破損が著しく、緊急車両以外は通行止めであり、東京でもレンタカーも借りられる状況ではなかった。仙台に戻るための交通インフラは完全に途絶えていた。

香川での講演が終了した翌朝、私は JR で家族のいる姫路に帰った。そこで、更に関係各位と連絡を取り合った。東北大学のキャンパスでは、被害は大きい古い建物も崩れていないこと、ただし多くの学生や教職員が体育館に避難しており大変に寒がっている、という連絡を受けた。東北大学には東京分室というオフィスが東京駅の駅ビル（サピアタワー）の中にあり、急遽、医学系研究科のヘッドクォーターとなった。そして、震災翌日から宮田敏男教授と山本雅之医学部長の指揮下で、各団体より送られてくる救援物資の配送手配を行うセンターとして機能した。しかし、緊急車両の手配をするにあたり、東北大学病院の職員からの要請を示す証明がないために緊急支援物資運搬に東北自動車道を使用できないという問題が出てきた。そこで、私の病院 ID と職員証をカラーコピーで取り込んで、その PDF を東京分室から分与することになった。かくして、地震翌日から東京を出発する東北大学関係の援助物資の輸送に関するドライバーたちは東北自動車道の検問で私の ID コピーを示すことで緊急物資運搬車両として通過できた。そして最初に運んだ荷物は、東北大学医学部の体育館で寒さに耐える地域住民や学生のために送った布団 600 組と毛布 2,000 枚と、山本雅之研究科長そのものであった。



写真 1 腎・高血圧・内分泌科の科長であり血液浄化療法部部長の伊藤貞嘉先生は透析部門の責任者であるために早急に仙台に戻る必要があった。東北自動車道のサービスエリアでの給油休憩中も、災害対策本部との定時連絡は欠かせない。



写真 2 東京町田市のあけぼの病院より緊急車両にて帰仙。左からあけぼの病院の透析技師長の稲葉光史さん、香川大学時代の教え子である腎臓内科医である伊原玄英博士。彼らの迅速な対応によって 48 時間以内で仙台に戻ることができた。

研究科長の山本雅之先生は緊急援助物資を積んだ真夜中のトラックで無事仙台に帰還された。血液浄化療法部の部長である伊藤貞嘉先生と私も至急、仙台に戻らなければならない。血液浄化療法部には防災無線が持ち込まれ、宮崎真理子副部長の元、押し寄せる透析患者に24時間体制で応えており、腎高血圧内分泌科の医局は森建文医局長の指揮の下、各関連病院との連絡網構築に努力していた。そんな時、東京都町田市にある「あけぼの病院」に勤務している元部下である伊原玄英先生と連絡がついた。仙台では透析患者が難民化している現状も踏まえて、あけぼの病院でDMAT用の緊急車両の編成をお願いした。そして、震災発生から40時間目に伊藤貞嘉先生と私は東京駅で落ち合い、2台の緊急車両に乗って出発した(写真1)。

この前日には福島原発が爆発したことが報道され、某所より東京から仙台に戻る東北自動車道でかなり強いホットスポットがあることが知らされた。我々には新潟～山形を経由する時間的余裕もなかった。そこで、緊急車両のドライバーを含めチームの内部被爆の予防のために至急、ヨウ化カリウムを手に入れる必要があった。そこで私は東京のDMAT隊と合流する前日(土曜日)に、兵庫県立循環器病センターの当直医に連絡して、院内にストックされているすべてのヨウ化カリウム錠(750錠)を無償で譲り受けた。更に、このヨウ化カリウムは東京分室により東北大学に物資を運んでくれる貴重なトラックドライバーさんたちにも分与され、彼らの内部被爆も最小にすることができた。かくして、48時間後には伊原先生とあけぼの病院の稲葉技師長の運転する緊急車両で、私と伊藤先生をはじめ東京に残された関係者は仙台に無事帰還ができた(写真2)。



写真3 災害時トリアージタグと学生ボランティアによる患者名札。
透析患者のトリアージタグは緑だが、血液透析療法は命綱である。名前の取り違えを防止する透析用のタグをボランティアのお手伝いで手作りし、最低限の透析情報(施行時間)を記入した。

3. 混乱する震災直後の仙台

震災から48時間後、東北大学病院では緑のタグをつけられた透析患者が東北大学病院に押し寄せていた(写真3)。血液透析には水、電気、透析回路、透析従事者が必要であるが、宮城県全体では地震直後より、宮城県内の53の透析施設で100%が停電し、91%が断水した。そして、翌日の朝9時時点では、透析が可能施設は9施設しかなく、使用可能病床は239床と震災前の14%に過ぎなかった。仙台市内では社会保険病院と大学病院が夜中までフル稼働して、社会保険病院では一日600名以上、透析ベッドが12床しかない大学病院でも120名以上の透析治療を行った(写真4)。そのため、大学病院でも医師、看護師、工学技士たちの消耗も相当であった(写真5)。

一方、震災から48時間が経過するも大学病院としては赤(Red Tag)カテゴリーI(最優先治療群)の受診が想定よりも少なかった。里見病院長は地震発生後24時



写真4 果てることのない患者に精根尽き果てる私と同僚の大場先生。
マシンのように働いたが、さすがに50歳の声が聞こえるようになると体力が続かない。若手医師も最初はテンション高く働いていたが、1週間が過ぎると全速力では働けなかった。



写真5 東北大学病院血液浄化療法部に応援に来てくれた伊原先生と稲葉技師長。
あけぼの病院からの透析応援のおかげで、東北大学病院血液浄化療法部のスタッフにも活気が出た。

間で、軽症者の入院患者をすべて準強制退院にし、一般外来の中止宣言し、東北大学病院全体を高度救命センターとして特化することを決定した。しかし、今回の震災の犠牲者は冬の巨大津波による被害が中心で、阪神大震災のような瓦礫の中で埋もれた被災者のクラッシュ症候群はほとんど発生しなかった。そして、重症者でも交通インフラの破壊や寸断で内陸部の東北大学高度救命センターまでたどり着ける状況でなかった。

4. 仙台から石巻へ

震災発生後3日目、徐々に断片的であるが被災現場との連絡がようやく取れるようになり、沿岸部は震災発生72時間という重要な局面を迎えつつあった。一般

に災害対策では災害後12時間を情報初動期、12時間～72時間を災害対応期、72時間以上を復旧復興期と区分しており、人命救出は72時間以内に最善を尽くすことが最優先事項である。72時間以降では新たな被災者の救命率が著しく低下することが知られている。前述のように、交通インフラの寸断によって患者搬送も十分でない以上、東北大学病院の医師を沿岸部に展開する全国のDMAT組織と合流させ、水際で被災者援護をすることが決定された。沿岸部で唯一稼働していたのは完全免震構造の石巻赤十字病院であり、沿岸部被災者のほとんどがこの拠点に集中していた。石巻赤十字病院の医師は震災発生直後から不眠不休で働いており、東北大学病院に強い医師の派遣要請があった。

東北大学病院の救命救急部は前線からヘリで送られて



写真6 石巻赤十字病院に向かう公用車と自衛隊橋梁部隊。道路や橋が寸断されていたので、通常のコースでは石巻にたどり着けなかった。地図を片手に走っていると自衛隊橋梁部隊と遭遇し、無事石巻まで到着できた。



写真7 石巻赤十字病院の外観。石巻近辺で機能できた唯一の病院である。病院全体が免震構造であり、広大な駐車場とヘリポートを装備している。病院は盛土の上に乗っているため、津波被害を免れたが、周辺は完全に水没していた。



写真8 石巻赤十字病院の災害対策本部会議。全国から14の赤十字社DMATが24時間以内に駆け付けた。しかし、会議で話される話にも明らかなものはほとんどない。地震による家屋倒壊による被災者はほとんどいなかった。多くは津波による溺水や低体温症によって命を落とされたようであり、Dead or alive がはっきりしているのが今回の震災の特徴である。

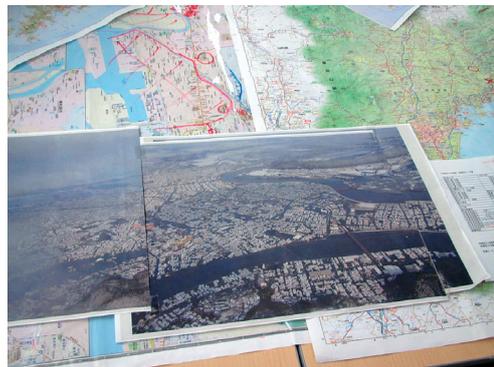


写真9 石巻赤十字病院の災害対策本部会議資料。震災72時間の空撮写真と実際の地図を対比しながら、明日の探索部位を検討した。水没の原因は町全体が地盤沈下したためであるが、この時点で津波から3日過ぎても町の水が引かないのが不思議だった。

くる赤～黄色への対応（3次救急体制維持）のために院内に残し、各講座でその経験とキャリアから有志を募り、石巻赤十字病院のDMAT活動への応援部隊と避難所・診療所のサポート部隊を東北大学病院から派遣する事になった。東北大学病院ですら透析難民が溢れている状況であり、前線の石巻ではもはや限界に近い状況で透析液がなくなりつつあるとの情報も寄せられた。私は香川大学在籍時には高度救命救急センターでの勤務経験もあり、かつ透析専門医であるということで第一陣の石巻支援部隊に組みこまれた。

急ごしらえの応援部隊に病院長専用の黒塗りの公用車のキーを渡された。トランクには詰めるだけの米や水、医薬品を積んで石巻赤十字病院に向けて出発した。運転手を用意する状況ではない。ハンドルは私が握った^(写真6)。大地震と津波で道路や橋は寸断され、幾多の迂回を繰り返しながらようやく石巻に到着したのは大震災発生72時間後だった^(写真7)。我々は、全国の日赤から派遣された14のDMAT隊と合流し、定例のミーティングに出席した^(写真8)。石巻の空撮の写真を見て驚いたことに、津波後3日もたっているのに石巻市街地のほとんどが水没していた^(写真9)。この時、石巻市街の水が引かない理由について誰も明確な答えを見いだせなかったが、後日、これがプレートの沈み込みによって町全体の地盤が沈下した結果であることを知らされた。そして、全国のDMAT隊がこの水没地帯を避けながら生存者の探索を行うものの、会議では失望しか報告されなかった^(写真10)。

5. 災害拠点としての石巻赤十字病院

石巻赤十字病院では、毎日に患者数が増加して行った。



写真10 石巻赤十字病院災害対策本部会議における探索報告。
前線に行けない関係者と情報を共有するため、各DMAT隊がその日の被災者救援探索を大型スクリーンに投影して報告する。あまりの被害の甚大さに石巻在住の医療従事者にとっては目を覆うケースもあった。

我々は外科・内科混成チームの3交代制で病院内の診療を代行した^(写真11)。石巻赤十字病院のロビーでは多くの帰宅困難者が寝泊まりで溢れかえっていた^(写真12)。しかし、震災後72時間が経過すると残念ながらいくつかのDMAT隊は撤収を開始した。初期派遣されたDMAT隊員も、いずれかの日赤病院で通常の仕事（医師・看護師・薬剤師・事務員など）をしている貴重な人員である。毎日が緊張感の強いられる災害現場と会議室の床での仮眠だけでは疲労は回復しない。石巻赤十字病院の会議室に毛布を引いて、仮眠をとっていても断続的に余震が襲ってくる^(写真13)。石巻赤十字病院は完全免震構造で、病院の基礎にある巨大なバネのような構造物によって大きな余震では病院全体が動く。まるで外洋フェリーの船倉にいるかのような錯覚に陥った。あまりにも余震が頻回に起こるため、この船酔い感覚は避難してきた患者たちにも同様に起こり、必要以上の不安を掻き立てた。

今回の震災診療で意外に困ったのが精神科疾患、特に統合失調症の患者たちであった。元来、安定した統合失調症の場合、作業療法も含めて静かな郊外の施設で平穏に生活されていた。しかし、この津波で施設とともに内服薬（向精神薬）と医療記録がすべて流されてしまった。震災から3日以上経過すると、おそらくこれらの薬剤の血中濃度が著しく低下し、度重なる余震と相まって夜中になると幻聴、幻覚などが出現するようになった。実際にこれらの患者たちが危害を加えるかどうかは別にして、避難所での共同生活には困難を極めた。しかし、多くの患者がごった返す石巻赤十字病院のトリアージでは肉体的障害がない患者なので緑タグをつけられる。しかし、不眠治療に使用する程度のマイナー・トランクライ



写真11 石巻赤十字病院で全国のDMATチームと医療支援を行う私。
夜中になると不安感が募るのか、避難所から患者搬送が増えた。限界定員を超えて患者を受け入れたため、ロビー（ワード）には患者が常に溢れていた。石巻では偽医者も現れるぐらい、医療が切迫していた。時計は朝の4時38分を指しており、3交代の深夜勤務である。

ザーでは幻覚や幻聴はコントロールできない。余震の続くストレス環境下では日毎に統合失調症は増悪し、夜中の病院フロアを縦横無尽に走り回る肉体は元気な患者さんと最終的には追い駆けっこが始まってしまった。けがや内科系の病気で収監されている患者のほとんどは病室ではなく、フロア（ワード）に簡易ストレッチャーを並べて、点滴治療等を受けている^(写真14)。だから、夜中に奇声を上げながら走り回る患者さんは危険である。もちろん、病院にも向精神薬もそれらのストックはあるが、元来、精神科病院ではないために施薬のバリエーションもなく、量も限られている。そして、前医の施薬情報も皆無なためにどのような処置（施薬）をするべきかもわからない。最終的には病院内の鬼ごつこの果てにタックルして押し倒し、大量の鎮静薬を投与することになってしまった。



写真12 石巻赤十字病院の玄関ロビーと階上の血液透析待合スペース。
緑のトリアージ隊がロビーで患者を振り分ける。避難所行の巡回バスが1日1回だけなので、トリアージエリアの外では、帰宅困難者がそのままの寝泊まりしている。しかし、極寒の病院外に追い立てることはできない。2階には血液透析室があり、沿海部の血液透析患者が自分の順番をロビー階上の待合室で待機している。



写真14 石巻赤十字病院のワードに收容された被災者たち。
平時では、「こんなに広い廊下を誰が作った」、と事業仕分けでやり玉にあげられる可能性が高いが、この病院がなければ更にたくさんの犠牲者が出た可能性がある。

派遣から2日目、少しずつ通信機能も回復し、電話回線は依然厳しい状況であったがパケット通信が時々つながるようになった^(写真15)。当初は東北大学災害対策本部から石巻赤十字病院への連絡も私の携帯メールで行っていたが、情報が統合されるようになると、石巻は物資、人的供給も好転しているので次は気仙沼に移動せよとの命がくだった。

6. 気仙沼から札幌への疎開作戦

石巻から戻った翌日、災害対策本部にて10人規模の気仙沼市民病院への応援部隊を編成し、キャンパスに支援物資を詰め込んで仙台を出発した。気仙沼までは緊急車両専用となった東北自動車道を北上し、岩手の一関インター経由で3時間かけて気仙沼に到着した^(写真16)。マイクロバスを降りると、町全体がなんとも表現できない



写真13 石巻赤十字病院災害対策本部会議で仮眠をとるDMAT隊員。
押し寄せる被災者に対応するために、各自交代で休みを取るが、会議室のフロアで寝ても疲れは取れない。更に、不定期に来る余震によって船酔いしたような状態になる。

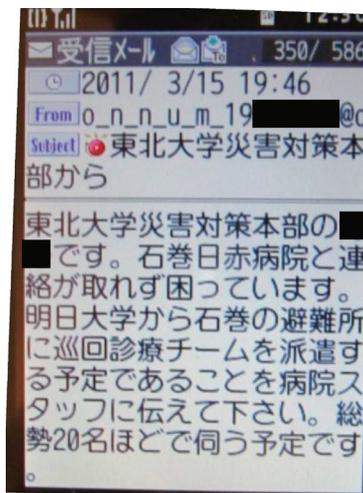


写真15 当初は携帯電話のパケット通信が被災地との連絡手段だった。

匂いに満ち充ちていた。形容することは難しいが、ありがちな漁港の潮の香りと動物の腐敗臭にトイレの汚水を混ぜ合わせたような臭いだった。

気仙沼市立病院では十分な自家発電能力が回復しておらず、石巻より過酷な状況だった。電力供給がないためロビーも廊下も薄暗い。病院玄関には何枚かのホワイトボードが並べられており、入院患者の一覧がカタカナ表記で更新されていた。時折、行方不明の家族が怪我をして運ばれてはないかと、安否確認のためにホワイトボードを食い入るように見つめる人が訪れる。ただ、多く的人是落胆という大きなため息をつきながら病院の急坂を降り、避難所までの長い道のりを歩いて帰る。医局では、震災直後からの常勤医師の悪戦苦闘ぶりに頭が下がった(写真17)。医局では、おにぎりの炊き出しが並べられているが、なるべく自分で食料や飲料水は持参するように心がけた。避難所で家族の安否を心配し、そして飢えている人が沢山いると思うと、胸が痛んだ。

気仙沼市立病院の血液透析室では、志津川や歌津のような沿海部から命からがら避難してきた透析患者が多数いた(写真18)。私が気仙沼に入った目的は、避難所生活を行っている多くの透析患者を環境のいい地域へコロニーごと疎開する作戦の現場指揮をとることである。震災発生後1週間が経過して、私が気仙沼に派遣された理由は、気仙沼市立病院が夜間透析対応を控え、透析患者に対する災害緊急対応を必要最小限に縮小することにしたからである。この理由は三つあり、一つ目は水道、電気、医療材料の供給が不安定な気仙沼で、市民にも十分な医療が提供できない状況で透析医療だけを特別扱いできない。二つ目は、気仙沼市立病院の職員自身も多

数被災し、長時間労働によって疲弊していた。特に職員の1/3は自宅が津波によって流されるか床上浸水したために、避難所から出勤してくるものも多数いたため、透析室のベッドの一部を被災した職員の仮設ベッドとして活用する計画が立案された。非常事態に医療職の確保は被災地の中核病院として非常に重要である。災害の規模の大きさを目の当たりにして、短期的な構想よりも何カ月、場合によっては年単位に及ぶ戦いが始まろうとしていることは容易に理解できた。気仙沼市立病院では職員が安心して働けるような環境を整えなければ、長期的な医療レベルを維持できない(写真19)。

そして最後、最大の理由は兵庫県透析医会より阪神大震災の際に経験した震災関連死予防に関する提言を宮城県が受け入れたからである。この提言とは、神戸では多くの透析患者が被災直後の圧死などの直接死因よりも、不十分な透析と長期に及ぶ劣悪な避難所生活によって、心血管系ストレス病ともいえる脳卒中、肺塞栓、心筋梗塞、急性心不全などで多数亡くなった苦い経験があった。無理に被災現場でとどまることは、不十分な血液浄化ができないために合併症が発生しやすい状況となる。患者の生命予後が一番に考えるのであれば、被災地での透析は医学的にも推奨されないとの提言であった。

更に、気仙沼では津波火災によって町の主要施設が被害を受けており、水、電気、ガスなどの早急なインフラの回復が困難と想定された。もちろん医療資源供給も不十分であり、患者は通院のためのガソリン確保もままならないために、週2~3回、透析患者を送迎する家族の負担も相当なものであった(写真20)。そこで、宮城県と宮城県透析医会は東北大学病院の血液浄化療法部と連携し



写真16 気仙沼主要街道に打ち捨てられた車。この地点で海から4Kmの場所だが、今回の津波では車で避難しようとした人たちが多数、車と共に亡くなった。

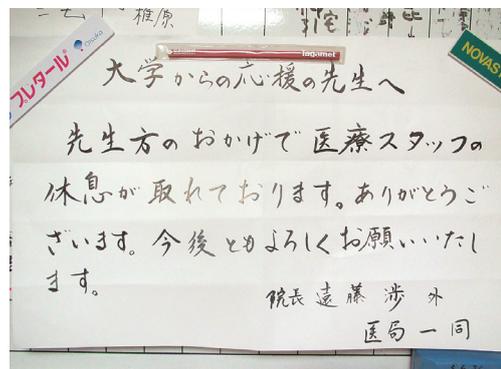


写真17 気仙沼市立病院医局掲示板の院長メッセージ。震災発生後、被災現場では医師をはじめ医療従事者が限界まで働いていた。長期化する災害医療では、休息も重要である。常勤医師たちの多くも被災している状況では、病院は休んでも本当の休息はなかなか訪れない。

ながら、自衛隊に協力を要請し、比較的元気な透析患者をコロニーごと北海道・札幌地区に移送する計画が立案された。

透析担当の上野先生（泌尿器科）と私は気仙沼市立病院で透析を行っている100名以上の患者さん一人一人に、札幌への疎開計画の主旨を説明していった。移送にかかる費用は日本透析医会が負担し、また居住費用は札幌市が市営住宅の無料貸与を申し出ていた。しかし、「透析患者を被災地で頑張らせないプロジェクト」に関して多くの患者は猛反発した。透析中に全患者を回診し、一人ずつ被災状況をインタビューしながら、移住計画を丁寧に説明したものの、「息子が生きていいのか死んでいるのかもわからない状況で、札幌に行けるか!」、「どうせ死ぬなら、ここで死にたい」、「俺

たちを邪魔者扱いする気か!」、「それなら、明日からこの病院に来ませんので、どうもお世話になりました」、とほとんどの患者がこの計画を拒絶した。それでも、私たちは粘り強く家族の方々とも面談を行い、更に翌日には説明会も行って理解を求めた。家族のほとんどは、この計画に賛同していただき、粘り強く患者さん自身に説得もしていただいた。そして、3日かけて、ようやく78名の疎開患者リストを作成し、東北大学病院の血液浄化療法部にメールを送付できた。

この移住リストは最終的に宮城県災害対策本部にもたらされ、細部にわたる78人の移送計画が練られた。しかし、津波によって完全に機能を停止した仙台空港は自衛隊と米軍による復旧がすすめられていたが開港する目途は立たず、78人すべてを輸送できるジェット機が着



写真18 気仙沼市立病院血液浄化療法室で透析を受ける患者たち。水、電気の供給が不安定で最低限の透析療法を提供するしか出来なかったため、コロニーごとの疎開計画が立案された。



写真19 夜間透析を取りやめた気仙沼市立病院血液浄化療法室。水、電気の節約だけでなく、自宅を津波や火災で失った多くの職員の院内避難所として、透析ベッドは看護師たち職員の簡易宿泊施設として提供された。



写真20 ガソリンを求める車列。沿海部にある気仙沼に行くには、東北道一関インター（岩手県）経由で行くしか方法がない。内陸部の一関市では地震の被害は軽かったが、ガソリンを求めて果てることのない車列が続いた。気仙沼ではガソリンは水より高価なものとなった。



写真21 気仙沼の透析患者を大型バスで移送。自衛隊のエスコートで患者を移送する。東北自動車道は戒厳令下と同様で、一般車両は通行禁止である。もちろん、ガソリンの供給も滞っていたので、街中でも一般車両は見かけなかった。

陸できる空港が宮城県にはなかった。最終的には航空自衛隊松島基地に航空自衛隊のC1輸送機を呼び寄せて、札幌に移送することとなった。しかし、使用する航空自衛隊C1輸送機は離着陸距離が短い、兵站輸送専用機であり与圧も弱く、しかも最大でも40名しか乗る事が出来ない。そのために、2日に分けて移送する必要性に迫られた。また、輸送機は与圧も不十分であり、体力の乏しい透析患者には酷な輸送計画であることが想像できた。そこで、一旦、気仙沼市立病院から東北大学病院に79名全員を入院させ、十分な管理透析を行った後に体調を整えてから飛行機に搭乗させることになった。

最初の気仙沼への派遣から4日後には、この計画が関係省庁や部署（内閣府、学会、宮城県、札幌市、自衛隊、関連病院、受け入れ病棟など）へ周知された。私はチャー

ターバス2台と看護チームを率いて気仙沼市立病院に患者を引き取りに向かった。気仙沼市民病院には大型観光バスを横付けすることができなかったために、市民病院から500mは離れている大型小売店舗の駐車場にバスを止め、ボランティアの力を借りて病院から78名の透析患者を乗車させた。自らの作成したリストで点呼、確認を行い、自衛隊の車列に守られて乗せて東北大学病院に向かった^(写真21)。バスの中では看護師チームによる問診・バイタルの確認を行うと、23名が37.5℃以上の発熱を呈していた^(写真22)。避難生活によって住環境は悪化していたので、新たなインフルエンザ等による感染症の可能性も懸念されることから、東北大学高度救命救急センターの除染区域にバスを止め、全員のインフルエンザチェックを行った^(写真23)。幸いなことに誰一人としてイ



写真22 気仙沼から移送中の透析患者。バスの中で看護師（中央）とともに簡単な問診と体温測定を行ったところ、たくさんの発熱患者が認められたため、全員に感染症スクリーニングが必要となった。



写真23 気仙沼から移送した全患者に感染症検査を施行。多くの移送患者が発熱していたため、入院収容する前に全員にインフルエンザ検査を始めとする感染症検査を行った。



写真24 学生ボランティアによる患者名札やタグの作成。一度に79人の透析患者を同日に入院させた。札幌行きの荷物のまとめや患者の移送に他学部を含め沢山のボランティアが活躍した。



写真25 航空自衛隊C1輸送機に乗り込む透析患者たち。懸命の説得で気仙沼を後にした透析患者であるが、元来は兵站輸送用であるので収容スペースは小さく、手荷物も1個までと制限された。

ンフルエンザ・ウイルス陽性者が出なかったこともあり、全78名は病院学生ボランティアに連れられて割り振られた各病棟に入院できた。

当初は故郷である気仙沼を去る事を嫌がった患者たちも、恒久的な移動ではなく適切な透析生活の維持のための疎開である事に理解を示された。皆、バスに乗り込むと口々に、昔、戦争中に東京から子供たちが疎開してきたことを懐かしそうに話していた。大学病院では東北大学の様々な学部の学生がボランティア登録をして、患者さんの誘導や荷物の運搬などを率先して手伝ってくれた^(写真24)。学生は故郷の祖父母を思い出しながら、丁寧に手書きの名前タグを作成し、また患者たちは孫のように若いボランティア学生を格好の話し相手にしてしばしの安寧な時間を楽しんだ。

患者を40人ずつに振り分け、3月22日、23日の2陣に分けて東北大学病院から航空自衛隊松島基地に送り出した。昼夜を問わない自衛隊員の懸命の復旧作業で、滑走路はなんとか修復され、小牧基地からC1輸送機は定刻に到着した^(写真25)。そして、気仙沼の透析患者はむき出しのジュラルミンシートに体を固定され、機上の人となり、北海道千歳空港に到着することができた^(写真26)。

7. ステージング・ケア・ユニット (SCU) としての 東北大学病院

最終的には、相馬市と石巻市からも移住希望があり合計80人を3月22日、23日に分けて航空自衛隊C1輸送機で北海道札幌市及び近郊の医療機関に転入院させることができた。このような大規模災害の広域避難において、搬送時の休憩地点・中継地点として患者のメディカルチェックを行う場所や機関をステージング・ケア・ユ



写真26 航空自衛隊C1輸送機に乗り込んだ透析患者たち。

比較的元気な透析患者さんをピックアップしたが、C1輸送機の与圧は弱く、札幌まで無事到着できるか不安な面もあったが、全員無事に千歳空港に到着できた。

ニット (Staging Care Unit) と呼ぶ。今回の移住計画において、大学病院への入院は、患者の容態確認、移動先への伝達、二次避難先での入院施設の調整を容易とし、患者の移動をより安全なものとすることができた。一度に80人の患者を文句も言わずに受け入れていただいた各病棟の看護師さんや各科の先生方には本当に頭が下がる。我々は通年の防災訓練を怠ったことはないが、高度先進医療の拠点をSCUとしての機能させる訓練は行っていない。想定外の激甚災害における大学病院の役割と考えるうえで貴重な経験となった。今回の一連のオペレーションは大学病院という高度医療と行政機関を動かせる病院であったから可能であったともいえる。最後に、大学病院の血液浄化療法部で関係各位にきめ細かな連絡と差配を続けた宮崎真理子准教授には本当に頭が下がるとともに、人間として常に冷静に行動することの重要性を教えていただいた。

後日談であるが、気仙沼にも復興の槌音が響き始めた5月下旬、札幌地区に疎開していた気仙沼周辺の透析患者は無事チャーター機で仙台空港に帰郷された。我々の科長の伊藤貞嘉先生も、その患者さんたちの帰郷を仙台空港で満面の笑みをもって温かく迎えられた。我々が地域医療支援の重要性に目覚めた瞬間でもある。

8. 震災復興と東北メディカル・メガバンク 機構への期待

もうすぐ3・11の東日本大震災から1年が経とうとしている。沿岸部の瓦礫の山の処理はまだ十分に進んでいないが、東北大学は確実に復興に向けて前に歩き始めている。東北大学を中心にアカデミアは新しいミッションを負い、新たなビジョンを掲げて始動した。破滅的な社会状況からの単なる復旧ではなく、さらに発展をとげる復興へのロードマップとして、山本雅之先生を機構長に東北メディカル・メガバンク機構が平成24年2月1日に発足した。私は東北大学に来てまだ1年半も経っていないが、このメディカル・メガバンク機構の地域医療支援部門の教授を拝命した。私のみならず皆が、「神戸が復興できたのだから仙台でできないはずがない」、と信じてこのプロジェクトを推進している。単なる復旧ではない。傷ついた沿岸部の医療を再生し、更にバンク事業で最先端研究に結び付け、最終的には東北のみならず日本の科学技術・医学の発展に寄与する巨大プロジェクトである。このプロジェクトを我々はやり遂げなければならない。そうでなければ、予想もしていなかった死を無念にも迎えてしまった2万柱以上の御霊に申し訳ない。

これが、大震災に二度遭遇した私の率直な感想である。どうか、皆様の叡智をこの東北メディカル・メガバンク機構に注いでください。そして、10年後の東北が素晴

らしい発展を遂げ、もはや被災地ではない、むしろ世界が注目する科学、医学の中心となっていること夢見て、着実に歩いていければと思っています。

雨ニモ、風ニモ、津波ニモ負ケズ

八重樫伸生

医学系研究科婦人科学分野・教授

当日：3月11日

東京からエコチル^{※1}の会議を終え、新幹線で白河に移動中、那須塩原（栃木県）を過ぎたところで地震発生。新幹線が止まってからも、かなり激しい揺れが続く。インターネットで「仙台近辺でM8.2の大地震が起こり津波が発生」ということを知る。

電話も通じず、不安なまま停電した車中に8時間以上閉じ込められる。

救援部隊が来たのは夜11時ころ。

新幹線の線路を20分ほど歩き、JRが準備してくれたバスに乗って那須の山中のホテルへ。

ホテルロビーに設置してある大画面のTVで状況を把握。

夜12時過ぎ、大広間に収容され、塩おにぎりの提供を受け、温泉に入りホッとする。

大広間に100名程度が雑魚寝状態で3時間程度仮眠。TVで状況を見守りながら、とりあえず明朝、仙台に戻る方策を思案する。山奥のホテルで、大地震後でもあり、街灯も消えており、山道を夜間に移動するのは危険と判断。夜が明けてからの行動開始が良いと思い、まずはタクシーを明朝6時に予約。

※1 環境省の行っている、子どもの健康と環境に関する全国調査の略称

帰仙：3月12日

朝6時、避難している乗客から相乗りを二人見つけ、夜明け前に出発し、白河までのタクシーで移動。

山道であるが、このあたりの被害はそれほどなさそう。しかし、白河に入る4kmくらい前から大渋滞となっており、タクシーをあきらめ徒歩へ。新幹線の新白河駅は閉鎖。さらに徒歩で1km離れた白河駅へ。8時ころ到着したが、一見、大きな被害もなさそうで、従来線は動くのではないかと期待していたが、今日は全面運休という張り紙がありがっかり。…というところで、目の前に

白河厚生病院往きのシャトルバスが巡回してきたので、本来の目的がその病院に行くことだったことを思いだし乗車。市内の一部は土砂崩れや屋根がわらの落下などがあり、次第に被害の大きさが実感される。白河厚生病院では本来は昨日会うはずだった産婦人科部長が当直されており挨拶し、とりあえずお互いの無事を喜ぶ。さらに他の産婦人科スタッフにも会って無事を確認。病院長にもあいさつしたところ、病院自体は無傷であるが、近くの病院が倒壊し、100名程度の患者さんを引き受けるとのこと。また、近くで土砂崩れがあり重症者がかなり運ばれているという情報ももらい、次第に仙台の様子が不安になってくる。病院長のご厚意で、病院公用車で北へ。東北道は完全に閉鎖状態。福島市、郡山市などに入る前は大渋滞なので、迂回しながら北進。北に進むにつれ屋根の破損、家屋の倒壊、ビルの倒壊などが目立ち、ラジオを聞きながらますます被害の大きさに茫然とする。

宮城県南の状況(岩沼、名取)がかなりひどいようなので、仙台市内の情報を得るために、また仙台に入るとドライバーがその日に白河まで帰れなくなるので、宮城県南中核病院で下車し、白河厚生病院の公用車を戻すことにする。県南中核病院は無傷。すでに災害対策本部が設置され、救急車も運び込まれている様子。病院長には、大学病院から副病院長が陣中見舞いに来たものと勘違いされる始末。産婦人科医の安否を確認した後、また公用車を借りて仙台へ。

沿岸のほうは水没しているようなので山側のルートで仙台入り。途中の街では家や蔵が倒壊しており、仙台の街中、特に大学の研究室の建物が無事かどうか心配となる。何と言っても医学部3号館は大学のすべての建築物の中でも、宮城県沖地震クラスの地震がもう一度来たら第一に倒壊する建物、という耐震診断を受けている。16時ころ、やっと大学病院へ到着。大学病院は病院長を災害対策本部長として動いており、戦場の中に放り出されたような気分。自分の居住区である3号館は外見だけは無事。産婦人科の入院患者さんの安否、教室員の安否を確認。石巻、気仙沼、スズキ病院などの情報が全く入らず。

不気味な静けさ：3月13日15:27

各位

東北大学病院とその周辺はあまり被害ありません。

宮城県の災害医療の中心となつてがんばっています。

教室員も全員無事。

今のところ、各病院に来ているのは軽傷者が中心です。

その意味するところは不明。

産婦人科としては、岩手医大のxx教授、山形大学のxx教授と連絡を取りながら、対応しています。

人員再配置：3月14日14:01

ありがとうございます。

幸い、産科の拠点化が完了しておりますので、分娩を扱う病院は生き残っています。

しかし、被災地周辺の開業医は全滅で、その妊婦さんが拠点化した病院に集まっています。

被災のひどいところに教室員を派遣したいのですが、そこにたどり着けないのが現状です。

今朝から、被災地周辺を取り囲むように、病院を拠点化して人を派遣しています。

状況把握：3月14日18時ころ

各位

宮城県内の分娩体制をお知らせします。

- 1) 仙台医療センターにxx先生を臨時派遣。
- 2) 県南中核病院にxx先生とxx先生を臨時派遣。
スズキ病院には昨日、xx先生を派遣し、すべての分娩を県南中核病院に送るよう手配済み。
- 3) 本日、県南にxx先生を派遣し、A病院、B病院、C病院などを視察。
A,B,Cの分娩は刈田病院で無条件に引き受けすることにになりました。
- 4) 吉田と佐々木、T'sにも派遣し、分娩は仙台赤十字に送るよう手配済み。
- 5) 環状線沿いのD病院とE病院、こども病院には昨晩、私が直接行って、分娩を全てこども病院に送るよう手配済み。
こども病院には、仙台社会保険のxx先生を臨時に動かして派遣。
F病院の分娩はすべてこどもで。
- 6) 石巻赤十字病院には、xx先生とxx先生を派遣済み。
- 7) 多賀城と塩釜の視察に、今朝、xx先生を派遣し、G,H,I,J,K病院、坂総合病院などを視察。分娩を

すべて仙台医療センターまたは大学病院に送るよう指示しました。

- 8) 気仙沼市立病院には明朝、xx先生とxx先生の2名を派遣。
- 9) L産婦人科にも昨晩いってきました。
無理せずに大学に送るよう言いました。
- 10) M病院は自然分娩は自前で行うとのことで、帝王切開は大学へ。
- 11) 古川には昨日、xx先生を派遣。
N病院、O病院の分娩はすべて大崎市民病院に搬送というルートで。
- 12) 県北のP病院の分娩は栗原中央病院で対応。
P先生ご自身が病院に出向いて分娩することになりました。
- 13) 仙台市内の病院は、仙台赤十字、公済、市立、仙台医療センター、大学病院、すべて今のところ、まだ大丈夫です。
受け入れできなくなれば、山形県立中央病院、山形大学で受け入れ可能。
山形はほとんど被害もなく、かなり余裕があるようです。
- 14) 気仙沼と石巻の開業施設は全く機能不全のようです。
とりあえず、以上です。

産科機能不全：3月15日6:40

- 1) 石巻は医療圏が約20万、仙台（東北大学病院）から約30km。
石巻赤十字病院には常勤が3名です。
当日、石巻に出張していたものも入れて4名で頑張ってきました。
昨日午後、東北大学から産婦人科医2名、小児科3名を含む8名を派遣しました。
したがって現在、石巻赤十字病院の産婦人科医は6名です。
周辺に分娩を扱う開業医が4件ありますが、1件以外は連絡が取れません。
連絡がとれた1件も「産科機能不全」状態です。
- 2) 気仙沼の医療圏は約6万人、仙台（東北大学病院）からは車で3時間（普段であれば）。
常勤が2名。周辺に分娩を扱う開業医が2件。
昨日午後、奇跡的に常勤の産婦人科医の携帯と医局長の携帯がつながり、状況を把握。
実はこれが医療機関として初めての交信でした。

途中が真っ暗なので、夜が明けるのを待って、朝6時、産婦人科医、小児科医、整形外科医など9名を送りだしました。

泣けてきました。

3) 産婦人科医のマンパワーについて

被災地の周辺を取り囲むように、拠点病院に産婦人科医を派遣しています。

現時点では宮城県に限っては産婦人科医の派遣は不要です。しかし、1-2週間たってからどうなるかわかりませんので、その時点で改めてご相談します。

4) 産婦人科関係の物資について

仙台市内の病院も含めておむつやミルクが枯渇しかかっています。

物資の輸送は、最前線に直接、というよりも、まずは仙台に集積して、そこから被災地に搬送、というルートを考えてほうが良いかもしれません。

サバイバル系：3月16日10:54

I まずはじめに、このメーリングリストに福島医大と岩手医大の産婦人科教授も含めたほうが良いと思います。

II 宮城県の産婦人科診療で最も困っていること。

分娩で使うディスポの産褥セット

ガーゼ、帝王切開のドレープ、手術のガウン、手術用手袋

全国のすべての組織がそれぞれ動いていますが、指示を出すだけで実際には物は届いていません。

おそらく今のままだと3日後くらいに全国から種々の組織を通して物資がどっさり集まり、そのときには供給過多になってしまう、ということをおそれます。現在、山形側からの交通も確保されており、緊急車両の要請をすれば高速を走れます。

高速の中には緊急車両用のガソリンも給油できます(5,000円まで)。

今必要なのは、指示を出す人間ではありません。

自分で上記の物品をかき集めて、自分で緊急車両要請をして、自分でトラックかバンに物資を詰め込み、自分で運転して仙台の東北大学病院まで今日のうちに運搬する、そういうサバイバル系の人間です。

東北大学まで運搬してもらえると、あとはこちらで分配可能です。

この件は、なるべく多くの産婦人科医に情報を流してもらえると助かります。

III 宮城県の産婦人科人員配置と産婦人科医療の現状

1) 今朝、気仙沼に産婦人科医二人派遣。

完全に孤立状態で、情報がほとんど入らず。

昨日、とりあえず東北大学に妊婦7名をヘリで搬送。

2) 今朝、石巻に産婦人科二人派遣。

DMAT、日赤関連、などがかなり入ってきている。大学から、100か所ある避難所向けにマイクロバス1台に医師を20名ほど乗せて派遣。市内の産婦人科開業医がすべて壊滅。

開業医も石巻赤十字病院に集まって一緒に診療している。

3) 岩手県南に産婦人科医2名派遣。

4) 宮城県南の拠点病院に産婦人科2名派遣。

岩沼、名取地区から直接妊婦が来院している。

5) 仙台市内の状況

仙台市立病院(年間分娩800件)の分娩室が使用できない。

手術室でできるだけ分娩はしているが、残りは仙台市内に分散。

東北公済病院(Q名誉会員：分娩は年間1,200)はライフラインが復活して、かなり妊婦を受けている。

仙台医療センター(年間1,000)もOK。

仙台赤十字病院(年間1,000件)もOK。

東北大学病院は完璧に機能しています。

とりあえず、宮城県内の産婦人科は大きな混乱もなく、やっております。

ロジスティック：3月17日7:59

I まずはじめに…

東北大学病院は昨日から石巻の赤十字病院の支援、避難所への医療提供のためにバスを出しています。八重樫は隊長としてこれからバスに乗って石巻の避難所に行ってきます。

現地でメールも形態もだめです。

II 産婦人科の現状

宮城県内の分娩はなんとか手分けしてこなしています。

今日はかなりの物資(ミルク、おむつなど)が届くと思われま。

III 医療全体

各拠点病院には医師も物資も集まっています。

IV 最大の問題は拠点となっている病院に集まっている物資をどうやって避難所に運ぶか？

へりでしかいけないところにも避難民がかなりいます。

情報が一元化されておらず、錯綜しています。

ガソリンがありません。

ロジスティックで勝つ、という古代ローマ帝国に倣うことができるか？

現場視察：3月18日9:59

I 石巻の現状

石巻に行ってきました。

津波の後の土地一面が黒くて臭い泥が覆っており、泥田の中を歩く感じです。

残っている道路も、周りの家屋が倒壊しており、平常時よりも移動に非常に時間がかかります。避難所を少し回りましたが、各避難所に1,000人くらいが避難しており、現在産婦人科医が一人巡回して産婦人科の需要を調査しています。

II 石巻赤十字病院

水と電気はOK。

毎日5,000人分の食事が出ています。

昨日はほとんど食料が入らなかったそうで、このままだと後二日だと言っていました。

食糧難で、スタッフは一日におにぎり数個でがんばっています。

昨晩は全科から集まった日赤の救護班の先生がたには配布できないので自分で食料をとってください、という指示でした。しかし、食料については日赤本部や自治体、自衛隊などが動いておりますので、数日以内には改善するものと感じました。

III 産婦人科医の応援

産婦人科のある医療施設としては石巻赤十字病院だけが生き残っており、毎日5-6件の娩・帝王切開をこなしています。年間分娩数にすると2,000件くらいになります。

35週前の妊婦さんは被災地以外に移動されるでしょうし、これから妊娠される方も最初から被災地以外で分娩予約すると思いますので、この数が続くとは思えません。しかし、分娩数が前に戻ったとしても、長期戦となった場合、婦人科としての需要は多く、また避難所に往診するマンパワーも必要です。もう数日、様子を見てから判断しますが、現時点では以下の人的支援が適切と思われれます。

・毎日2人ずつ派遣し、一人1週間くらいで、交代していく。

・次の先生が現地に着いたら、前の先生が帰る、という形が良さそうです。

・上記を3カ月間継続。

・派遣する人間の資質としては「丈夫なからだをもち、欲はなく決して怒らず、一日に玄米四合と味噌と少しの野菜を食べ」ながら1週間を過ごせる人間です。

IV ロジスティック

東北大学に産婦人科物資を集め、ここから宮城県と岩手県南の関連病院、開業医に配送するシステムを作りつつあります。

人的支援：3月19日10:35

各位

I はじめに

これまでのメールの「仙台より#」の番号がダブったり前後したりしていました。

これからは3月19日で震災から9日目ということで、わかりやすく「仙台より9」としました。

II 物資の搬入状況

昨晩から各地より大量に産婦人科関連の物資が搬入されてきました。

ご支援ありがとうございます。

産婦人科関連物資は一度東北大学産婦人科に集積し、それを宮城県内の周産期関連施設に配送しています。必要物品の情報収集、在庫管理、搬入の作業、配送手配（乳業さんやMRさん、教室員の車など）などすべて教室員でやっており、教室全体で倉庫業・運搬業の感じになっています。

III 人的支援

日本産科婦人科学会の災害対策本部に流したメールで、多くの大学、施設から人的支援のお申し出がありました。

本当にありがとうございます。

まずは昭和大学から2名を1週間単位で派遣していただくことになりました。

さらに東京大学のDMATチームに産婦人科医を一人、入れていただくことになりました。

昭和大学チーム、東京大学ともに、最も被災人口の多い石巻赤十字病院に駐留いただきます。

1週間後のことは来週木曜日あたりに考えようと思っています。

3月19日13:34

日本産科婦人科学会

災害対策本部御中 (ccT 先生、U 先生)

3月19日13時時点での人的援助要請状況をお知らせします。

今週は以下をお願いをしました。

たくさん先生から応援の申し出を受けましたが、八重樫のほうでとりあえず以下に決めてしまいました。ご容赦ください。

来週以降のことは来週の木曜日ころ、再度、ご相談いたします。

宮城県：

昭和大学より2名を石巻へ

さきほど東北大学に自家用車で到着。

これから出発です。

岩手県：

順天堂大学より2名を盛岡へ

現在、V先生とW先生(順天堂)の間で調整中。

福島県：

X先生と電話で今日の朝11時ころ話しました。

福島県は特殊な事情のようです。

沿岸から妊婦さんが移動してきますが、逆に県外に避難し始めており、出入りがちょうどトントンになっている、とのこと。

今後はおそらく県外への避難が増えて、分娩はどんどん減少していくのではないかと、というのがX教授の推測です。

したがって、産婦人科医としての人的派遣については「お申し出は大変ありがたいが現状では必要なさそう」とのこと。

チーム編成：3月19日午後

日本産科婦人科学会

災害対策本部御中

I 人的支援

日本産科婦人科学会の災害対策本部に流したメールで、多くの大学、施設から人的支援のお申し出がありました。本当にありがとうございます。

まずは昭和大学から2名を1週間単位で派遣していただくことになりました。

今日の午後には仙台に到着予定です。

さらに東京大学のDMATチームに産婦人科医を一人、入れていただくことになりました。

昭和大学チーム、東京大学ともに、最も被災人口の多い石巻赤十字病院に駐留いただきます。

1週間後のことは来週木曜日あたりに考えようと思いません。

宮城県に関しましては、3月24日の朝に再度、ご相談させていただきます。

II 物資搬入状況

昨晚から各地より大量に産婦人科関連の物資が搬入されてきました。

ご支援ありがとうございます。

産婦人科関連物資は一度東北大学産婦人科に集積し、それを宮城県内の周産期関連施設に配送しています。必要物品の情報収集、在庫管理、搬入の作業、配送手配(乳業さんやMRさん、教室員の車など)などすべて教室員でやっており、教室全体で倉庫業・運搬業・問屋業の感じになっています。

AA先生

BB先生

順天堂大学からの応援は岩手をお願いします。

2名一組で1週間交代。

水食料は持参。

自家用車で行くか、公共の交通手段を使うかは杉山先生と相談を。

CC先生の携帯 xxx-xxx-xxxx。

まずは自力で今日中に岩手医大に到着してください。

その後の行動はDD先生の指揮下に。

夜は0度以下で、野宿を覚悟。

一部治安の悪化あり。

以上です。

どうぞよろしくをお願いします。

八重樫

EE先生

昭和大学のチームは石巻赤十字病院で働いてもらいます。

ご存じのように常勤医が通常業務以外の業務で忙殺されておりますので、施設内での分娩や帝王切開、外来を手伝ってもらいます。

避難所にも行ってきましたが、そちらは赤十字や各大学からでたDMATなどががんばっていますので、そちらに任せたい方がよいと思いました。

ただ、各地域で状況は違うと思いますので、先生の作戦の中で応援部隊を動かした方がよいと思います。

八重樫

日本産科婦人科学会

災害対策本部御中 (ccFF 先生、GG 先生)

3月19日13時時点での人的援助要請状況をお知らせします。

今週は以下のお願いをしました。

たくさん先生から応援の申し出を受けましたが、八重樫のほうでとりあえず以下に決めてしまいました。ご容赦ください。来週以降のことは来週の木曜日ころ、再度、ご相談いたします。

宮城県：

昭和大学より2名を石巻へ

さきほど東北大学に自家用車で到着。

これから出発です。

岩手県：

順天堂大学より2名を盛岡へ

現在、HH先生とII先生(順天堂)の間で調整中。

福島県：

JJ先生と電話で今日の朝11時ころ話しました。

福島県は特殊な事情のようです。

沿岸から妊婦さんが移動してきますが、逆に県外に避難し始めており、出入りがちょうどトントンになっている、とのこと。今後はおそらく県外への避難が増えて、分娩はどんどん減少していくのではないかと、というのが藤森教授の推測です。したがって、産婦人科医としての人的派遣については「お申し出は大変ありがたいが、現状では必要なさそう」とのことです。

東北大学

八重樫

3月19日18:38

日産婦学会 災害対策推進本部 御中

各大学からの人的支援を日産婦で一本化していただき、大変助かります。

ありがとうございます。

以下、お願いします。

- 1) 当分の間(数週間くらい?)、岩手チーム(2名)と宮城チーム(2名)の2チームを編成していただければ助かります。
- 2) 岩手チームはまず盛岡まで行って、KK教授の指

示に従って活動をお願いします。

- 3) 宮城チームは、石巻赤十字病院に常駐していただきます。

- 4) 各チーム1週間交代が良いのではないかと思います。

1週間の途中で交代の場合、担当大学でつないでいただくと助かります。

- 5) 各チームの交代時の申し送りは、電話やメール等でそれぞれ直接お願いします。

交通手配、気候、食料事情、病院の状況など、刻々と変わりますので…

以上は、岩手のKK教授と東北の八重樫からの共同でのお願いです。

どうぞよろしく願いいたします。

岩手医科大学 KKK

東北大学 八重樫伸生

応援部隊の心得：3月20日

- 1) 食事は原則各自持参。
宿泊は病院内で床の上に寝袋。
平常時の、普通の病院の応援とは全く違います。
- 2) 交代と申し送り
石巻に関しては、たとえば「毎週土曜日の昼頃に交代」ということにしてはどうでしょうか。
土曜日の朝に仙台を出発し、昼ころ到着。
申し送りをして前の組が午後の早い時間に現地出発。
なお、仙台から石巻は通常であれば車で1時間半です。
岩手については、KK先生からの指示を待ちましょう。
- 3) 交通
盛岡の岩手医大病院、仙台の東北大学病院にたどりついていただければ、後は杉山教授と八重樫で責任を持って、現地まで搬送いたします。
- 4) 日産婦では、先日のメールでお示して頂いたように、「岩手・宮城2名ずつのチームを1週間単位で、支援いただける各大学に順次出していただく」方式を考えています。その他のリクエストなど、ありましたらご教示ください。
それをお願いします。
原案は以下です。
各大学1週間を受け持っていただく。
2名一組で。

1週間をどのようにやるかは各大学考えていただく。

たとえば、2名が1週間でも良いと思いますし、2泊3日を3-4セットでも良いと思います。

被害状況報告：3月21日

各位

I 石巻の街の現状

昨日、再び石巻に行ってきました。

前に行ったときは街中が泥で覆われていましたが、今回はそれが乾き、細かいほこりとなって街をおおっています。

ただし、石巻赤十字病院のあたりは海からかなり離れていますのでそういうことはありません。

II 石巻の産婦人科の診療

市内開業医を回ってきましたが、すべて壊滅的な被害を受けています。

先生方の今後のことは宮城県の産婦人科の先生方とも相談していかななくてはいけないと思います。

石巻赤十字病院内は数日前に比べ、かなり落ち着いてきた感じでした。

昭和大学からの応援のOO先生やPP先生はお元気でした。

III 物資

日本産科婦人科学会、日本周産期・新生児学会、厚生労働省（成育医療センター）、名古屋大学などから大量の物資が運び込まれました。また福井大学、富山大学をはじめたくさんの先生方から直接物資を届けていただきました。

ありがとうございます。

2日前から大量にものが運び込まれ、教室を挙げて問屋業をしております。

現状では、産婦人科診療に必要な物資は宮城県内ではほぼ充足した感があります。

IV 人的支援

日産婦からの各大学1週間の人的支援システムができあがり、たいへん助かっております。

災害としては急性期を乗り切り、これから長い長い復旧の時期に入りつつあると思われます。

これは岩手県も同じではないかと思いますが、ぜひ長いスパンでのご支援をよろしくお願いします。

被害状況報告：3月23日 10:57

各位

A 日本産科婦人科学会宮城地方部会員の被災状況
学会員は全員無事です。

・気仙沼で開業産婦人科医が2施設、壊滅。

お一人は避難所生活とのことで、本日、私自身、気仙沼に入り、お会いしてきます。

・石巻は開業産婦人科医が7施設、被災。

5施設は壊滅。お一人は避難所生活でしたが、昨日、こちらからバンを出してご家族ともども仙台に移っていただきました。

・塩釜・多賀城は2施設が1階部分浸水。

しかし、一施設はすでに分娩も再開。もう一施設は数カ月は再開のめど立たず。

・岩沼・名取地区はスズキ記念病院（鈴木雅洲名誉会員が理事長）が被災。

しかし、1週間程度で分娩再開。

B 学会としての追加対応策のご提案

1) まずは、1か月以上、業務をできないような施設・会員の把握が必要と思われます。

2) かなりの先生が分娩をやめる、あるいは産婦人科をやめる可能性があります。

そういった先生方の相談に乗ったり再就職先を親身になって考える“誰か”が必要です。

3) 避難所生活あるいは被災地外の地域に避難している先生が大勢いると思われます。

そういった先生と連絡を取り、今後のことを考える必要があります。

4) 学会や医会として義捐金を募り、例えばですが「1か月以上業務ができない施設に贈る」という形が有効かもしれません。

犠牲者：3月23日 11:13

順天堂大学 QQ先生

日産婦災害対策本部御中

岩手への人的支援の件、昨日、KK教授と電話で話しました。

岩手はこれ以上のご支援を必要としないところまで回復したようです。

宮城県の場合、だいぶ事情が違います。

すでに石巻に1チームを派遣していただいておりますが、気仙沼のほうも人手不足です。

気仙沼に2件あった開業医が壊滅したので、気仙沼市立

病院に仙台から産婦人科医を補充しています。

もし可能でしたら、岩手に派遣している順天の第1組の後の順天大学大2組（および後続の日産婦チーム）を気仙沼に行っていただくことはできないでしょうか。

東北大学病院に来ていただければ、気仙沼までの足は確保します。

これから私自身が気仙沼に出向いて現状を見てきますが、これまでの報告では上記支援をいただけるとたいへんありがたいと考えております。

まとめますと、宮城県からの日産婦へのご依頼は以下になります。

- 1) 宮城県の石巻チームと気仙沼チームの2チームを同時並行で派遣していただきたい。
- 2) 各チームの編成や大学のローテーションなどは従来のご依頼通り。
- 3) まず仙台の東北大学まで到達していただき、仙台から石巻、仙台から気仙沼への交通の確保は東北大学が行う。
- 4) 各大学で交代要員を仙台に置く場合、仙台での宿泊については東北大学が手配する。

どうぞ柔軟な対応をよろしくお願いいたします。

被災病院の生活：3月24日10:42

各位

A まずはじめに…

日本産科婦人科学会宮城地方部会員が気仙沼地区と名取地区で各一名、合計2名の会員が津波に飲み込まれて亡くなりました。正式な手続きは追って。

B 気仙沼の状況

気仙沼に行ってきました。

病院のスタッフの多くが被災者でもあり、帰る家がありません。

また、アパートやホテルを借り上げたくても、市街地がほぼ壊滅しておりそれもあります。

スタッフの多くが家でゆっくり休みたいのに、帰るところがなくて、しかたなく病院で寝泊まりして仕事をしています。

気仙沼に行かれる先生はその辺の気遣いもよろしくお願いいたします。

なお、普段は病院に着くと白衣なども出してくれますが、そういったものもありません。

病院のライフラインは完全に復旧しています。

食事は炭水化物中心ですが、病院内では食うには困りません。

ただし、ほとんどが塩おにぎりと思ってください。

乳製品、野菜、肉や魚介類はほとんど出ません。

見通し：3月25日

SS先生（cc、TT先生、UUさん）

1) 子宮頸癌と子宮体癌の取扱規約について

八重樫の担当分の化学療法原稿を作成しました。

大変遅くなりご迷惑をおかけしました。

実は震災に日に新幹線の中でこれを書いておまして、仙台に帰り次第、チェックして送ろうと思っていました。ところが、運悪く新幹線の中に缶づめになってしまし、それから仙台に戻って今日までの2週間、何が何だかわからないうちに毎日が過ぎて行きました。

2) 震災のその後

日産婦のチームが石巻赤十字病院と気仙沼市立病院に派遣され、常勤の産婦人科医は大変助かっております。

また、被災地の分娩を取り扱っていた開業医7件が壊滅しました。

そこで扱っていた年間1,000件くらいの妊婦さんが分散されました。

一方で、宮城県内の大きな病院のライフラインが復活し動き出し安心していたところで、貯水タンクの故障や病院の煙突が傾いて危険など、各病院に様々な支障がわかってきて、それぞれ規模を縮小してやっています。そのために、無傷の大学病院に産科の搬送が多くなり、産科病棟はフル稼働です。東北大学病院の分娩数は毎年900件以上あり、今でも国立大学では日本一なのですが、今年はずっと多くなるかもしれません。

数カ月はこういう状況が続くそうですので、教室としても、また宮城地方部会としても、今回の日産婦からの人的支援は何にも勝るものです。本当にありがとうございます。

人的ご支援につきまして、継続していただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

3) 産婦人科の診療に関わる物資は、少なくとも宮城県内は充足しております。

現地レポート：3月29日7:39

VV先生

東北大学の八重樫です。

このたびは石巻のご支援ありがとうございます。

石巻に先生方のみならず、東北大学の教室員一同、また宮城地方部会員一同、先生方の迅速な対応とボランティア精神に深く感謝申し上げます。

これからも全国から順次、先生方がご支援にいらっしやります。

そこで、各先生方のご活躍をうちのホームページに載せて行くことで、日産婦学会への報告（とりあえずのもの）としていこうと考えております。

もしよろしければ、簡単な報告書や感想でも結構ですので、送っていただくことはできないでしょうか。

なお、差し支えなければ先生や宮上先生の写真が数枚つくと、現地レポートとしてさらに良いようにも思います。お忙しい中、大変恐縮ですが、どうぞよろしく願いいたします。

中長期の見通し：3月30日7:44

WW先生

関係各位

石巻も気仙沼も、どちらも地域の拠点病院で仕事内容はほぼ同様です。

仙台までは、石巻から1時間半、気仙沼からは3時間です。分娩中心ですが、良性疾患の手術も結構あります。

癌は東北大学病院や宮城県立がんセンターに送られます。

求められるのは、科長の代りに外来、分娩、帝王切開をできる先生です。

おそらくお一人は各大学の関連病院の科長に出せるくら

いの先生で、もう一人はその下で仕事をする先生、というイメージになると思います。現在、石巻の分娩は年間1,500件ペース、気仙沼は年間500件ペースです。ただ、これがずっと続くとは思われません。

3ヶ月くらい経つと本来の数（石巻700、気仙沼300）に落ち着いてくるのではないかと考えています。

復興のノロシ：4月29日

仙台のKスタジアムで楽天イーグルスの開幕戦。

震災から7週間、やっとこの日がやってきました。

ポカポカ陽気の中、球場にたくさんの人が足を運びましたが、私もその一人。

星野監督の挨拶、さとう宗幸さん（青葉城恋歌）による国歌斉唱、アメリカ大使からボールを受け取った松山英樹さん（東北福祉大学、マスターズのベストアマ）の始球式。

田中の気合のこもった投球が続き、引き締まった試合のまま3対1で楽天の勝利。

試合終了とともに会場の熱気は最高潮に達しました。

3月11日以来、クサクサしていた気分も一気に晴れた気がします。

立ち上がれ東北!!

八重樫

東日本大震災と東北大学名取艇庫

石井誠一

東北大学大学院医学系研究科

医学教育推進センター

准教授

東北大学名取艇庫は仙台空港にほど近い名取市下増田の北釜地区にあり、貞山運河に接して太平洋側に位置す

る^(写真1)。1982年12月の竣工以来、春・秋の海上運動会や体育の授業で全学の学生・教員・職員に広く利用されてきた。同時に、東北大学漕艇部（ボート部）の本拠地でもある。名取、岩沼の貞山運河は太平洋と直結するため塩水であり、潮の満ち干による流れもあり、冬期もめったに凍結しない。そのため、漕艇部員は美しくのどかな貞山運河で四季を通じて水上練習するのが常で



写真1 2009年12月貞山運河と名取艇庫



写真2 2009年12月貞山運河

あった^(写真1,2)。漕艇部が塩竈湾から貞山運河に拠点を移したのは1970年代である。1976年には医学部の学生五人が乗るエイトクルーが日本代表として世界選手権に参加し、8位に入賞している（この選手のうち二人はその後、医学部教授職に就いている）。その頃は民家に借間したりプレハブの簡易住宅で合宿していた。それに比べて名取艇庫は鉄筋3階建てで六十名以上を収容できる大変、立派なものであった。しかし、四半世紀を過ぎ老朽化が目立ち始めた。また、男の世界であった漕艇部にも女子選手が定着し、女子用設備の拡充が求められていた。そして、竣工から28年を経過した2010年度、念願の大規模改修を行っていただけることになり、工期は2011

年2月半ばから3月末までとなった。これにより、漕艇部員は名取艇庫で冬期・春期合宿を行えなくなり、一年生を含む総勢三十数名が2月下旬から埼玉県戸田市のボートコースで練習することになった。また、内装改修のため、艇庫に保管していた旧制第二高等学校端艇部以来百有余年間の様々な資料は川内に移送した。3月に入り、艇庫には管理人さんと改修工事の関係者を残すのみとなり、常なら40名前後のボート部員が午前、午後の水上練習に励む貞山運河には一艘のボートも浮かんでいなかった。そこへ東日本大震災が襲った。このときの貞山運河と艇庫の様子は仙台空港から飛び立った国土交通省防災ヘリの空撮中継に映り、毎日新聞社の報道写真や



写真3 2011年4月貞山運河と名取艇庫



写真4 2011年4月貞山運河



写真5 2011年4月名取艇庫の周辺の状況



写真6 2011年4月名取艇庫内部の状況

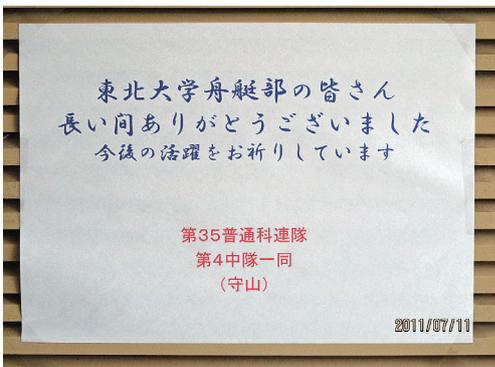


写真7 自衛隊からのメッセージ



写真8 2011年10月貞山運河と名取艇庫

河北新報社の震災写真集にも写されている。管理人さん、工事関係者と近隣の住民の方向何人かが艇庫の3階から梯子で屋上に登り危機を逃れた。その十数名は水の引くのを待ち、2階に降りて一斗缶に流木を拾い集めライターで火を起こして一夜を明かしたという。仙台空港には千人以上が閉じ込められ、貞山運河は流された家屋や瓦礫、鉄骨などで埋め尽くされた^(写真3,4)。周辺地域が壊滅的被害を受けた中で^(写真5)艇庫は原型を留めて残ったが、内部の損傷は著しく1階の倉庫部分に保管していた二十数艇はほとんどが流失か大破した^(写真6)。艇庫の壁面には地表から4mを超える高さに津波の跡が残された^(写真4)。この間、漕艇部員は戸田にいた。巨大地震の発生時にたまたま艇庫の改修工事が入っていたという全くの偶然により、難を免れた。だが、実家が被災した部員もあり、そうでない者も被災地の状況を思い練習に打ち込める状態ではなくなった。原発事故発生により戸田で練習する各大学の漕艇部は屋外練習を中断し、東北大学漕艇部も一時、それに倣った。一方、東北地方への交通網が断絶したため郷里への移動もままならず、安全が確保されている地に留まって欲しいという親元からの要望も届き、部員は埼玉に残ることになった。しばらくして被災地のボランティア活動に加わる部員もいたが、新学期の開始が延期され貞山運河では練習不可能であることから戸田での合宿を続けた。

力を合わせて歩むこと

大隅典子
医学系研究科・教授

311地震の発生当時、ちょうど学生さんの一人とディスカッション中だった。

携帯のエリアコールが鳴ると同時に揺れ初め、「大きい……よね?…」と言った次の瞬間、かなりの横揺れになったので、慌てて二人でテーブルの下に隠れた。その間に、淹れてもらったコーヒーのカップが落ちるは、書棚から本が降ってくるは、キャビネットが倒れるは、まさにテレビで見たことのある地震体験車のような情景だったが、揺れがひとまず収まった時点で、ラボメンバーに「火の元、確認した? 逃げるよ!」と声をかけて、外階段で地上に降りた。

宮城県では大きな地震が約30数年周期で起きているので、着任した当時から「そろそろ来ますよ」と言われていたのだが、ついに来た訳だ。そういう意味では予測

貞山運河は再び艇を浮かべることができるのか想像もできない状況であった^(写真3,4)。名取艇庫は復旧活動のために派遣された自衛隊第35普通科連隊第4中隊の駐屯基地として利用されていた。このような状況下で4月初めには漕艇部同門会員が各地から集まり、艇庫内の瓦礫・土砂の除去作業を始めた。人海戦術で撤去を進め、内部はしだいに復旧した。同時に艇庫周辺と北釜地区の瓦礫撤去も進められ、六月末には自衛隊が撤収した。艇庫の内部には隊員からのメッセージが残されていた^(写真7)。この頃には貞山運河の瓦礫撤去も進み、平らな水面が見られるようになった。十月には医学部の漕艇部員と同門会の有志により津波襲来後初めてボートを漕いだ^(写真8)。この日の貞山運河は穏やかであった。地元北釜地区で被災された住民の方が仮設住宅からわざわざ駆けつけ、見守ってくださった。

現在、名取、岩沼の貞山運河は全長4.5kmのうち、満潮時には2km程度の水域で練習可能であるが、干潮時は水底に残る中小の瓦礫が顔を出し、安心してボートを漕げる状態ではない。また、艇庫のライフラインはすべて途絶したままであり合宿ができない。津波に対する部員の不安感も強く、練習拠点として復帰するにはまだまだ時間を要する状況である。東北大学漕艇部は新たな練習水域を広瀬川や釜房ダムとして活路を求めている。

は当たっているのだが、若干誤差が大きいというべきか……(註:その後、今回のものは宮城県沖地震とは異なるという見解も出されている)。数日前、私が東京にいたときにも、中程度の地震があったはずだが、その時点で予測はできなかったのだろうか……。

昨日の夕方は道路が渋滞になってしまったこともあり、医学部キャンパスに近いN先生宅に泊めて頂いた。まったく光の無い夜というのは、やはり心細いものだ。余震もかなり続いて、寝られるかと危ぶんだが、だんだん閾値が高くなって、あ、また揺れてる、程度でも眠りに落ちた。

本日は正午頃に来られるメンバーで集合して、壊滅状態の研究室を少しずつ片付けを始めた。まだ余震が続いているので、とにかく、動線確保を原則で片付けて、小部屋によっては現状復帰に近いものもあるが、顕微鏡やクリーンベンチなどの破損はどうしようもない。年度末でもあり、いろいろ処理が大変だろうなあ……。

私のオフィスも、自宅の部屋も、かなり悲惨な状況に

なっているのは、これまで片付けを怠ってきたせいだ。すでに数年前の地震でも本棚が動いていたが、今回は2つのうちの1つが崩壊。さらに横幅2メートル以上もあるサイドボード全体も前に動いていて、また、残念なことに、倒れたワインセラーの扉のガラスが割れて中からワインが飛び出して割れてしまったものもある……。まあ、カタチあるものはいずれ、ということでもあるのだが、何より「そろそろ綺麗に片付けなさい」という天のお告げと聴くべきだろう。でも、どこから手を付けてよいのやら……（溜息）。とにかくまず、ラボとオフィスを復旧させること。

お見舞いメールやDMを下さったくさんの方々、有難うございました。沿岸部の方々に被災された方々は、大変なことと拝察する。今後さらに心配なのは原発の被害かもしれない……。

無理はせずに、でも、助け合って、できることから何かすること>じぶん。



上記は地震の翌日に「仙台通信」というブログに書いた文章に少し手を入れたものです。あれからもうすぐ1年。本当にあっという間でした。研究室の復旧に関しては、とりあえず心のケアも含めて「毎日正午に集合！2, 3時間復旧作業に従事！」という号令を出し、1ヶ月くらいの間は研究室での炊き出しで合宿のような生活をしてきたこともあります。

精神科の友人によれば「震災ハイ」というのだそうですが、1ヶ月くらいの間は、そんな状態だったかもしれません。いつでも外に逃げられる「災害モード」の出で立ちで、テンションを上げて暮らしていました。ところが、ちょうど4週間目になる日の夜中にM8レベルの余震があったのでした。これが精神的にはかなりきつかったですね。「シジフォスの岩」のように、せつかく元に戻しても、また崩れ去るのか？と思うと、皆、かなり落ち込んだと思います。でも、そのうちに、市ガスの復旧やガソリン供給の安定化によりライフラインが元に戻るとともに、震災前に当然のものと信じていた「普通の生活」に近くなってきました。

ちょうど震災ハイだった頃、東京での用務があり、「何が何でも行く！」と思って、山形空港経由で都内に出向いたら5時間かかりました。その後、仙台-羽田便（4時間）や、在来線で福島に出てそこから新幹線（3時間）というルートも試しました。普段「仙台は新幹線で2時間かかりませんから、名古屋より近いんですよー」と宣

伝し続けてきたのですが、在来線しか無かった時代に、どれほど仙台が首都圏から遠かったのかをまざまざと知ることになりました。「何が何でも東京に行く！」という意識は、「東北地方、大変ね（可哀想ね）……」と思われたくないという強がりだったと思います。神経関係の学会を主催するという仕事も、「何が何でも成功させる！」という勢いで、かなり無理をしましたが、皆さんのおかげで無事に終えることができました。東北大学脳科学グローバルCOE教育研究拠点の事業も最終年度の活動を、若干縮小気味にしつつではありましたが、粛々と行いました。拠点から若い方々育てていくことは何にも増して嬉しいことでした。

多くの東北大の方々にとって、震災の位置付けは複雑なものがあります。それぞれ程度は異なりますが「被災者」であるという面と、「我々の被害はずっと軽いのだから、より大変な被災地支援を頑張らなければならない」という大志です。本震災記録集には後者について、多数の事例が載っていると思います。私自身は医学系研究科広報室のメンバーと「今、何ができるか？」を考え、情報発信してきました（詳しくは広報室・長神准教授の寄稿参照）。その間に気づいたのは、国際広報のレベルがまだ圧倒的に低いということでした。もっとも、これは日本全体の問題であり、種々の組織・機関から英語での発信が日本語と同程度に為されているかということ、アカデミアの最高府である日本学術会議でさえ足りない面があるくらいなので、今後のグローバル化推進のために喫緊に取り組まなければならないことだと思いました。また、思いがけず、被害の大きかった気仙沼の被災者支援を行なっている女性と知り合いになり、個人的なレベルで支援物資を送ったりもしました。

地震から約1年が過ぎ、ようやく気負っていた憑き物が落ちてきたように思います。「いやー、大変でしたー。電気が止まってフリーザーの中の研究サンプルが駄目になってしまったので、数カ月分の遅れをこれから取り戻すところです」と素直に言えるようになりました。これまでも、研究科には多数の方々の篤志やご寄付を頂いてきましたが、これからも学内外、国内外の皆様力を借りつつ、東北地方の復興に少しでも力になることができたらと思っています。

関連英文エッセイ

Osumi N.: Life science must go on: standing up after the 311 disaster. *Genes Cells*, 16 (7), 741-744, 2011